
リーフブレード

杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リーフブレード

【Nコード】

N8615V

【作者名】

杏

【あらすじ】

突然の父の失踪、震災の謎、裏の真実、ロケット団の復活、そして、ある手違いから手に入れた卵、そこから少年リーフの旅が始まる。

なお、様々なキャラの名前を一部を除いて、漢字にしています、

注：描写はありません。

プロローグ（前書き）

初めまして、杏（あな）です。

初心者です。ポケモン5世代分に、アルタイルの要素が、あります。よろしくです。

プロローグ

ここはカノコタウン、一度津波で崩壊したが、人とポケモンが協力して復興した、
しかし、いまだに謎が多い。

「おい、リーフ 今日久しぶりにライモンシティに行くぞ。」
「うん……」

彼はリーフ、この物語の主人公である。

しばらくして

「着いたぞ、あまり遠くにはいくなよ。」

すると突然後ろから男性が！

「すみません、お嬢様からです。」

「えっ……あ、そうですか……。」

「では、失礼します。」

「……何だろうこの小さな箱は、とりあえず帰るまで開けない

でおう。」

彼はしばらく遊びまわったりしていた。

「リーフ、そろそろ帰るぞ。」

「うん」

プロローグ（後書き）

終わった・・・

第1話 箱の中身（前書き）

夏休みか・・・

第1話 箱の中身

翌日

「・・・おはよう。」

「おはよう、リーフ。」

「・・・あつ、そういえば・・・。」

「なんだ？」

「・・・これ。」

「ん？　なんだ？　この箱は。」

「・・・知らない。」

「よし！　開けてみよう、・・・モンスターボール？

誰からもらったんだ。」

「知らない・・・。」

「・・・よし！　出してみよう。」

ポーン

「これは・・・卵か。」

「・・・」

「とりあえず博士の所にもっていく。」

「うん・・・。」

「ん？　外からなんかきこえるぞ？」

「だからわしゃしらん」

「いるはずですが・・・が・・・に、それについて教えてほしいだけです！」

「・・・あまり聞こえないな、まあいいや、いつてくる。」

「いつてらしゃい・・・。」

「しらん！ 帰れ！」

「・・・また来ます。」

その人は帰って行った。

第1話 箱の中身（後書き）

リーフ

「・・・・・・・・・・」

作者

「えーと・・・・・・・・」

第2話 失踪（前書き）

暑い、曇りならいいのに・・・

第2話 失踪

「・・・」

時間だけが流れていく、父が研究所に行ってからすでに5時間は経っているだろう。

歩いても2分ぐらい、2時間前には帰ってきてもいいのに。

彼は、明日には帰ってくると思って寝た。

翌日

「・・・いない。」

父親は、遅くても深夜の11時には帰ってくる、帰らなくても手紙は置く。

そして手紙はなかった。

「・・・そうだ、研究所に行こう。」

そして。

「・・・ あっ、モンスターボールだ。あれ？

何かついてる。・・・てがみ？」

その時、彼はものすごい殺気に襲われた。

その手紙にはこう書いていた。

さら た。

その真ん中に薄く何かが書かれている、しかし薄すぎてわからなかった。

「・・・これ、もしかして・・・ゆうかい
されたのかな？」

「ハイ！ リーフ君おはよう。」

彼女は、アララギ博士だ。

「・・・おはようございます、ところで父さん
見なかったですか？」

「見なかったわよ、何かあったの？」

「・・・これ見てください。」

「・・・さら　た？　・・・もしかして」

「・・・かもしれません」

「じゃあこれからどうするの？」

「・・・」

第2話 失踪（後書き）

もう2日目か・・・早いな。

第3話 旅立ち（前書き）

草むしりするんじゃなかった・・・

第3話 旅立ち

「……………」

「そうだ、ポケモントレーナーにならない？」

「えっ、トレーナー……ですか……」

「だって、そのモンスターボールリーフ君のでしょ？」

「ええ、そうですけど、卵ですし……」

「でも、私のかんだと、もうすぐ生まれると思う。」

「何ですか？」

「何と無く、長年のかんかしら。」

そのとき！ モンスターボールの卵がゆれはじめた、その卵にひびができ始めた、そして切り裂くように卵がわれた。

「……これは……」

「このポケモンは、別の地方のポケモンのようね。」

「なんていう名前のポケモンなんですか？」

「このポケモンは、アブソルよ、ハウエンのポケモンみたいね。とりあえず、研究所で見てみましょう。」

10分後……

「めずらしいわね、このアブソルリーフブレードを覚えてるわよ。」

「そんなにめずらしいですか？」

「ええ、普通は覚えられないのよ。卵技でもね……」

まあ、そんなかんじで、しばらく話をして。

「で、どうするの？ 旅にでる？」

「……はい、旅にでます。」

「じゃあ、いろいろとあげるわ、まずは図鑑と、バッジケースと……」

・。

「・・・まあ、こんなかんじね。」

「ありがとうございます。」

「いってらっしゃい」

こうしてリーフの旅は始まった。

第3話 旅立ち（後書き）

まさか第1話が夢に出てきたのをアレンジしたなんて言えないよなあ・・・

第4話 迷路（前書き）

お知らせ

明日は、24時間テレビがあるので次の投稿する可能性が、低いです。

第4話 迷路

「やべえ、なんだよこの町。」

ここは、カラクサタウン、地震の影響で、迷路になっている。

「・・・ポケモンセンターに、行けるのか・・・」

とりあえず、左の道に行くことにした。

奥に進むと、さらに道が分かれていた。

「・・・戻ってしまった、マップは無いのかよ・・・」

彼は半分も進めなかった、入り口で途方に暮れてる時。

「案内しようか？」

人が訪ねてきた。

「・・・わかるんですか？」

「うん、僕は、もうこの地方のバッジ全部ゲットしたからね。」

「そうなんですか・・・」

とりあえず、その人について行っただ。

すると、あつという間に、ポケモンセンターに着いた。

「本当に着いた、ありがとうございます。」

えーっと、お名前は。」

「僕の名前は、銀次郎だよ。」

「俺の名前は、リーフです。」

「・・・あれ？」

「どうしたの？」

「そういえば、カノコタウンにいたような・・・」

「うん、いたよ、僕は、知ってしまったんだ、

震災の謎をね。」

「どういことですか、銀次郎さん。」

「君が知るの早いよ、それに・・・」

「それに?。」

「知ってしまうと。」

死んじゃうよ。

「ええ、死ぬんですか！」

「うん、君は、まだ未熟だからね、強くなったら教えるよ。」

「そうですか・・・。」

「じゃあ、僕はもう寝るよ、おやすみ。」

「おやすみなさい。」

第4話 迷路（後書き）

なんか、パソコンより、携帯のほうが、
アクセス数が2倍くらい多いです。

なんでだろう・・・

第5話 銀次郎（前書き）

お知らせ2

i - フィルターのせいかわかりませんが、挿絵できません。
・ ・ ・ ・ ・ まあ ・ ・ ・ ・ ・ 頑張つて楽しんでください（汗

第5話 銀次郎

ビュウウウウウ

「・・・すごい風だな、これじゃ外に出れないよ。」

「おはよう、リーフ君、起きるの早いね。」

「普通ですよ、銀次郎さん、それより外を見てくださいよ。」

「・・・すごい風だね。」

「そうですね。」

「・・・あつ！」

「どうしたんですか！」

「・・・いや、何でもない。」

「本当ですか？」

「うん、本当だよ。」

「そういえば、君は、何のポケモンを持ってるんだ？」

「アブソルですよ。」

「へー、新人なの？」

「そうですよ。」

「僕は、チャンピオンなんだよ、ジョウトの。」

「・・・」

「あ、いやっ、その、本当だよ、じゃあ僕のバトルを見てっよ。」

「はいはい、わかりましたよ。」

そして・・・

「いけ！ オーダイル！ アクアジェット！」

「・・・うわ！ 一発で倒した！」

「まあ、こんなもんだね。」

「本当に、すごいですね。」

「うん、ありがとう。」

「で、さっきのは、何だっただんですか？」

「……気のせい！」

「本当ですか？」

「うん、そうだよ、それより、次君の番だよ。」

「えっ、はい、わかりました」

「頑張ってね。」

第5話 銀次郎（後書き）

ふうふうふう．．．．．前書きあれでよかったのかな？

第6話 どうも もす です1（前書き）

知ってる人は、このタイトルにピンとくるでしょう。
わからない人は、調べてください。

第6話 どうも もす です1

「よし、行くぞ、アブソル。」

「いけ！ ヨーテリー、体当たり！」

「よけて、リーフブレード。」

しかし、アブソルは、避けきれなかった、しかもアブソルは、耐久が低いので、すぐに倒れた。

「……………」

「まあ、最初は、そんなもんだよ。」

「そうですか……………」

そして…………。

「僕は、先に寝るよ、おやすみ。」

「おやすみなさい」

「…………ふう…………あれ？あなたはだれですか？」

「どうも もす です。プラントさん。じゃなくてリーフさん。」

「ええ！ 何で俺や父さんの名前を知ってるんですか！」

「あなたの、父親は、私にとっての侍ハートです。」

「侍ハート!？」

「侍ハートじゃなくて師匠でした、これはつまり、リンゴジュース100%3割引きです、キャー。」

「師匠なんですか……………」

「最近、師匠はどうしてますか？ です。」

「それが、かくかくしかじかで……………」

モスギスに行方不明と、伝えました。

「そうですか、それはがっかり……………」

「……………」

「私は、先にねておりもす。どうも もす でした。」

「・・・何だろう、あの人変だなあ・・・
見た目にギャップがあるというか・・・何というか・・・
先が心配だなあ・・・。」

第6話 どうも もす です1（後書き）

前書きのYoutubりで調べるといいですよ。

第7話 どうも もす です2（前書き）

モスギスはもともと意味不なのです。

「よし、今日はこのあたりにして・・・。」

「どうも もす です。」

「うわぁ、でた！」

「だいぶ慣れてきたですね。です。」

「ありがとうございます、もすさん。」

「実は、私の名前は、モスギスなんです。これはおどろき 桃の木
ウルガモスです！

もすにちなんで。」

「ああ、そうですか・・・はいはい。」

「あなたのアブソル珍しいですね、リーフストームじゃなくて、
リーフブレードを覚えているなんて。」

「ええ、そうですね。」

ぷるるるる・・・」

「おっと、ここでいったんCMです。」

「久しぶりね、モスギス。」

「あ、おかまの人、おかまは、おかまいなくでした、これはつつか
り。」

「キー、なんなのよ。」

「どうも もす です。」

ぷちっ・・・ツーツー

「・・・・・・」

「・・・これが・・・これがいわゆる夜のむふふ・・・
モスギスさん、このドッキリを忘れない内に帰ります。

どうも もす でした。」

「・・・何だったんだらう、あの人・・・
とりあえずサンヨウシティに行こう・・・」

第7話 どうも もす です2（後書き）

ああ、モスギス難しいです・・・

第8話 受け継がれる技（前書き）

今回は、いつもより、長めです。

第8話 受け継がれる技

「ここが、サンヨウシティか、・・・なにもすることないな、明日のジム戦にそなえてやすもう。」

「あなたが、リーフ君ね。」

「ええ、そうげすけど、誰ですか？」

「私は、マコモ、アララギ博士から聞いているわ。」

「そうですか。」

「じゃあ、早速なんだけど・・・。」

「えええ！ いきなり・・・。」

「ごめん、でも大事な事なの。」

「はあ、そうですか。」

「夢の跡地にいる『ムシャーナ』を捕まえてほしいの。」

「はい、わかりました。」

そして・・・

「まあ、ハイパーボールを沢山もらったし、マップも貰ったから、あとは

捕まえに行くだけだな。」

「まちなさーい。」

「えっ何ですか、今からマコモ博士に頼まれて、ムシャーナを捕まえに行くところですよ。」

「うそね。」

「嘘じゃないですよ。」

「じゃあ、バトルして勝ったらいいよ。」

「ええ、そんなむちゃくちゃな・・・。」

「春川さん、本当ですよ。どうも もす です。」

「ええ！ モスギス、何でこんな所に。」

「日頃の精神てきな疲れをとって大空に舞うんです……。」

「・・・わかったわ、あきらめる、ばいばい。」

春川とやはらは、さっていった。

「ありがとうございます、モスギスさん。」

「いえいえ、これぐらいのこと、どうも　もす　でした。」

「・・・よし、捕まえに行こう。」

そして…………

「これがムシャーナか。」

ドーン！

「ええ！　なんだあの緑のボール的なわ！大丈夫か！　アブソル！

うわぁ！　俺にも飛んできた！」

どさ！

……………

「……………ここは……………」

「ここは、マコモさんの研究室です。どうも　もす　です。」

「あ、……………モスギス……………さん……………」

「あの後私が、ムシャーナを、追い払いました。です。」

あ……………眠ったです……………まあ、いいや。」

一週間後……………

「ありがとうございます、モスギスさん。」

「そうですね、あははははははは。です、あ。」

「どうしたんですか。」

「私のディザソルが、あなたのアブソルと遊びたいそうだし、いいですか、おねがいします。」

「いいですよ。」

「じゃあ、早速。」

しばらくして……

「あ、どうやらあなたのアブソルに技を教えてるようです。」

デスカーンは、怪談にかぎります、ぞくぞくします、おー怖。」

「何の技ですか？」

「その名も！ シザークロスです。」

「しざーくろす？」

「そうです、虫タイプの技で結構な鶏の威力があるんですよ。」

「へー、そうなんですか。」

しばらくディザソルは、リーフのアブソルにその技を教えていた。

第8話 受け継がれる技（後書き）

デスカーンの中からミイラが！

てきな・・・

第9話 ジム戦 VSデント 上（前書き）

リーフ

「あれ？ 作者は？」

銀次郎

「腰痛らしい、ありえないんだぜ！ って言って倒れた。」

リーフ

「最後までそのしゃべり方なのか・・・。」

第9話 ジム戦 VSデント 上

「よし、明日のジム戦にそなえて寝るか。」

「どうも もす です。」

「あ、モスギスさん。」

「明日のジム戦アブソル一匹でいいですか？です。」

「あつ、そういえば。」

「そうだ、モスギスさんひらめいちゃいました。」

「何がですか？」

「私のディザソルを貸します、それでいいですか。」

「ええ！ いいんですか！」

「いいですよ、あなたに懐いてるみたいですし、はマグロがおいしいです、

特に回転ずしが最高です、竜巻に注意しましょう。」

「はい、わかりました、じゃあ借りていきます、ありがとうございます。」

翌日……

「……なんだ、レストランじゃん、来るとこ間違えたのかな？」

「いいえ、このあたりです、まちがいないです。とりあえず食事でもしましょー。」

「……じゃあ、いつはじまるんですか。」

「とりあえずこれ見るタンクです。」

「ん？ あ！ 注文書にバトルって書いてる、……よし！ このバトルを

たのもう。」

「お決まりになったでしょうか。」

「ミックスオレください。」

「・・・バトルで。」

「・・・ざわざわ・・・ざわざわ・・・
・・・ざわざわ・・・ざわざわ・・・」

まわりがどよめきだした。

「・・・これは驚いた、あなたラッキーですね、準備しますのでしばらく

お待ちください。」

そして・・・

「ええ！ まじかよ！？」

「もすは見えておきます。」

審判

「それでは、初め！」

「エトエティステイングタイム！ マツギヨ、出番だよ。」

「いけ！ アブソル！ リーフブレード！」

「ええ！ リーフブレード！？」

ズバッ！

アブソルのリーフブレードは見事にマツギヨに命中した、
しかも技と特性強運がはたらいて急所に当たった。

「くっ・・・珍しいティストだね、マツギヨ、雷！」
ズドドン！！

「うわっ！ 危ねー、よし！ もう一発！」

「マツギヨ、飛べ！」

マツギヨは飛んだそのまま

「マツギヨ！ のしかかり。」

どん！

マツギヨはアブソルにのしかかった、そして・・・。

「マツギヨ、10万ボルト！」

「ええ！」

アブソル大ピンチ！ はたしてどうなるのか！

第9話 ジム戦 VSデント 上(後書き)

リーフ

「こんなもんでいいかな？」

銀次郎

「うん、いいと思うよ。」

第10話 ジム戦 VSデント 下(前書き)

モスギス

「どうも もす です、番外編みてくださいましたか？
そのパーティは見ないでください、
恥ずかしいでガスー。」

第10話 ジム戦 VSデント 下

「マツギヨ、10万ボルト!」

マツギヨが電気を溜め始めた。

「・・・あ! そうだ!」

「なにかひらめいたのかい。」

「アブソル、不意打ち。」

「くっ、なかなかやるね、マツギヨ! 熱湯。」

アブソルに熱い水が襲い掛かってくる。

「もう一度不意打ち。」

アブソルは、うまく熱湯をぐぐりマツギヨに攻撃をした。

しかも急所に当たってマツギヨは倒れた。

「ありがとう、ゆつくり休んで、行くよ! ヤナツキー。」

「ヤナツキーか、何タイプだったっけ。」

「ヤナツキー、気合玉!」

「ええ! とりあえずはね返せ!」

アブソルはなんとか気合玉をはね返したが、若干のダメージを受けた。

「リーフブレード!」

「リーフブレードは相性悪いよ。」

「ええい、もうダメージさえくらえばいいや。」

「ヤナツキー、アクロバット!」

ズガッ! アクロバットは命中した、しかも道具を持っていない。しかも連打で。

「・・・なにか、なにか策は・・・。」

「ヤナツキー、ソーラービーム!」

ヤナツキーは光を吸収しはじめた。

「アブソル! 不意打ち!」

なんとかソーラービームは阻止できたが・・・。

「ヤナツキー、取り押さえろ。」

「リーフさん、シザークロスを使うです。」

「え、あ！ そうだった、アブソル！ シザークロス！」
「ええ！」

バスッ！

・・・・・・・・どさ！

「・・・・・・・・やったあ！ 勝った！」

「いやあ、いい勝負だったよ。」

「ありがとうございます。」

その日の夜・・・

「使う場面なかったですね。」

「いえいえ、いたから安心してバトルができたんですよ。」

「あ、盛りあがってるね。」

「あ、銀次郎さん。」

「あれ？ そちらの人は。」

「どうも もす です、モスギスです。」

「ふーん、モスギスというのか。」

こうして3人はしばらく盛り上がっていた。

第10話 ジム戦 VSデント 下（後書き）

杏

「モスギス、なにをしているんだ？」

モスギス

「キヤー、見ないでください、です。

恥ずかしいでガスー。」

杏

「？」

第11話 ロケット団（前書き）

杏

「……悩む。」

第11話 ロケット団

「・・・次はシッポウシティか、そろそろ出発するか。
そして・・・」

「まってくださいーい。」

「あ、モスギスさん。」

「どうも もす です。」

「なんですか？」

「いきなりですが、一緒に旅をしましょう。」

「ええ！ いきなり。」

「あなたの戦いに感動しました。なので・・・」

「おい！ ポケモンもらうぞ！」

「えええええ！」

「あ、ロケット団だ、ここは私にまかせてください。」

「えーっと、俺も戦います。」

「じゃあ、一緒に旅をしてくれるですね？」

「はい、わかりました。」

「オラア、なめんじゃねえよ！」

「なめたら汚いです。」

「くそー！ いけ！ クロバット、ココロモリ。」

「いくです。ミカルゲ。」

「いけ！ アブソル。」

「クロバット、ココロモリ、エアカッター！」

「ミカルゲ、不意打ち。」

「アブソル！ 不意打ち！」

ズバッ！ ドガッ！

「ぐわあ、強ええ、逃げるがかちだ！」

男は逃げて行った。

「・・・ふう。」

「じゃあ、行きましょう。」

「ええ、そうですね。」

こうして、二人は一緒に旅をすることになった。

第11話 ロケット団（後書き）

あ、いつもよりかくの早かったぜ（汗

第12話 ゴミ屋敷幼稚園 前編

「…………クサッ!」

「そうですね、なんででしょうねー。」

「……あれ、じゃないのか?」

「あ、警察の人がいる、あのー、なにかあったんですか?」

「いえ、ヤブクロンが来てからこうなんです。」

「ヤブクロン?」

「ゴミ袋っぽいポケモンですよ。」

「へー、それにしてもここは匂いがしないな。」

「ここにバリアを張ってるからですよ。」

「そうなんですか。」

がらがらがら…………

「ああ、なんか崩れただけか。」

「リーフさん、幼稚園児がきますよ。」

「ええ! 入ってる人いるの!?」

「そういえばそうですね、これはうつかり。」

「よし、確保!」

「…………」

「えーっと、どうなってるんです?」

「実は、ダストダスに操られているんです。」

「だすとだす?」

「ヤブクロンの進化系です。」

「うん、もしかして悪臭の原因?」

「ええ、そうです。」

「……うわっ! なんかきた!」

「リーフさん、やばいです、まずいです、トマトまずいです。」

「ここはいったん引きましょう。」

「・・・はあ、はあ。」

「あれがダストダスです。」

「ええ、本当にゴミ袋っぱいですね。」

「・・・。」

「そういえばダストダスの中にツタージャがいたような。」

「ええ！ それは大変、びつくらポンポン。」

「俺、助けに行きます。」

「行かないほうが、いいですよ、まあ、師匠も無茶する人でしたけど。」

こうして今夜は作戦がたてられた。

第13話 ゴミ屋敷幼稚園 後編

「で、どうするんですか、リーフさん。」

「とりあえず！」

「突っ込むとか言わないでくださいよ、ばれぱれです。」

「え〜。」

「そうだ、もしダストダスの特性が殻を破るだったら・・・。」

「！」

「つまりツタージャに当たらないように攻撃すれば。」

「おお！ それはいいアイデアですね。」

翌日・・・

「・・・クサッ！」

「ここは、物理系のがいいですね。」

「はい。」

「ドラピオン、レッツゴーです。」

「あ、モスギスさん、来ましたよ。」

「ドラピオン、地震です。」

ズドドド・・・

「あ、非物理攻撃ですね。」

「そうです、これで触らずに殻を破させることができます。」

「・・・なんか気持ち悪いですね。」

「あ、ツタージャが出てきましたよ。」
「今だ！ うおおおおお。」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「・・・・クサッ！」
「でも助けられてよかった、ゆかった、浴衣のおみこしです！」
「まあ、ツタージャが宿り木の種をしていましたからですね。」
「でもかなり弱っていますね。」
「まあ、回復するのを待ちましょう。」

そのあと幼稚園は元に戻り、ダストダスはマニアに引き取られたらしい。

新人トレーナーも増えていったのであった。

第14話 モスギスの実力

「テンテンテレター」

「モスギスさん、わざわざまねをしなくても・・・。」

「はい、よくなりましたよ。」

「ありがとうございます。」

「どうするんですか？ そのツタージャ。」

「うーん… 俺が引き取るよ。」

「そうですか、じゃあ、出発です！」

そして・・・

「へー、そうなんですか。」

「で、それが…。」

「はっはっは、また会ったな。」

「え、だれですか？」

「まったくです。」

「まあいい、今回は10人もいるぞ。」

「うわぁ！ どうするんですか。」

「大丈夫です、二人くらいいいですか。」

「いいんですか？」

「いいですよ、このくらい余裕です。こんなこともできます。」

「わかりました。」

「くそー、なめやがって。」

「なめたら汚いです。」

「ムキー！」

「相手は、クロバット、ココロモリ、トサキント、リザードか。」

「クロバット！ クロスポイズン！ リザード！ メタルクロー。」

「アブソル！ シザークロス！ ツタージャ、ツルのムチ。」

そして……

「うう、なかなか倒れない。」

「ひっひっひ、これで俺様の…。」

ドーン！ シュッ！

「あ！ モスギスさん！」

「助太刀にきた限りです。」

「ひい」

「逃げるが勝ちみたいな感じのは、ダメダメダメです。」
「にげる！」

「・・・ふう、ありがとう、モスギスさん。」

「いえいえ、このくらい。」

「それにしてもすごいですね、8人倒した上に俺を助けるなんて。」

「じゃあ、いきましょー。」

「はい。」

第15話 怪しい人

「到着です。」

「おお、ここがシツポウシティか。」

「あ、あっちがさわがしいです、行ってみましょう。」

「えーっと、絵を描いてるみたいですね。」

「あ、アーティじゃないですか。」

「おや、モスギス、久しぶり。」

「おひさしるのラー油です！」

「友人なんですか？」

「ああ、そうだ、きみは一緒に旅をしてるのかい？」

「ええ、そうですけど。」

ヒソヒソ「ちよつと変わってないかい？」

ヒソヒソ「ええ、そうですね。」

「なにひそひそ話してるですか、ぶんぶん。」

「ああ、悪い悪い。」

「それにしても周りの人がぼうぜんとしてますね。」

「あ、じゃあ絵のつずきをかくよ。」

「はい、また会う日まで、です。」

その日の夜……

「うん、眠れないな、少し外をうろつくか。」

「…………だ…………ああ…………」

「？ あれなんだろう。」

「……………！」

「あ、きずかれた。」

「お前、今の聞いてないよな。」

「聞いてません。」

「怪しいな、ちょっとこい。」

「いやです。」

「…………なるほど、じゃあここで叩き潰すのみ。」

「ええ！」

「おい！ 早く逃げろ！」

「銀次郎さん。」

「いいから！ 早く！」

「はい、わかりました！」

「はあはあ、ここまで走ったらいいかな…。」

翌日……。

「おはよーです。」

「あ、モスギスさん。」

「大変です。」

「そのわりには落ち着いていますけど。」

「とにかく来てください。」

「わかりました。」

「あ！ 銀次郎さん、ボロボロじゃないですか。」

「ああ、そうだな。」

「もしかして…。」

「ああ、……昨日のやつに、覚えとけ、昨日のやつの名前は、……。」

「銀次郎さん！ おーい！ ……。」

「気絶したみたいですネ。」

こうして、一つ謎が増えたのであった……

第16話 おもわぬ敵

「おはようございます、モスギスさん。」

「おはようです。」

「今日はジム戦か。」

「そうですね。」

ざわざわ・・・ざわざわ・・・

「なんだか騒がしいですね。」

アナウンサー

「えー、ただ今情報が入りました、情報によるとロケット団のボスが判明し...。」

「ロケット団？」

「ほら、前襲われたじゃないですか。」

「ああ、あれか。」

「ロケット団のボスはマサラタウン出身の赤井と判明しました。」

「赤井？」

「これってちょーやばいです。」

「ええ！ そんなにやばいんですか!？」

「なんだとー！ー！！！」

一人の人が叫んだ。

「えーっと、あなたは……。」

「あ！ 私知ってます、緑山さんですね。」

「おう、そうだ。」

「赤井って最初にロケット団を潰した人です。」

「ええ！ なんでそんな人が。」

「くそー、赤井め。」

「赤井ってどんな人なんですか？」

「カントー地方最強のトレーナーです。」

「……ええ！」

「赤井、魔が差したな。」

「で、緑山さんはどうするんですか？」

「そりゃあ、ぶっ潰す！ うおおおおお！」

「あ、どっか行っちゃった。」

こうして、世界中にどよめき起きたのであった。

第17話 逮捕（前書き）

ついにユニークが500をこえました！
みなさん、有難うございます、
これからもよりしくです。

第17話 逮捕

「やばいです、やばいです、ヤンバルクイナのバルジーナです。」

「そんなに、やばいことなんですか。」

「わーわーわーわーわーわー。」

「落ち着いてください、これあげますから。」

「モスギスさん、サイコソーダを飲んでふつーになりました。」

「はあ、よかったですね。」

「とりあえずジムにレッツゴーです。」

「わかりました。」

ジム攻略中・・・・・・・・・・・・・・・・

「やったー！ 勝った！」

そして・・・・・・・・

「次はヒウンシティですね。」

「じゃあ、早速出発！」

「ここは、ヤグルマの森か。」

「あ、赤い髪の毛の人が喧嘩しています。」

「お前らは、この俺が潰す！」

「ふん、この俺を倒したって、『あのかた』が居る限り無敵さ。」

「あのかたって誰だよ！」

「まあ、教えてやろう、そのかたの名は……。」

「赤井ですねー、ニユースで見ました。」

「なにっ！ 知っているのか！」

「もう世界じゅうに。」

「……………」

ガシッ

「捕まえたです！ 警察に送ります。」

「ふん、いいさ。」

「ご協力ありがとうございます。」

「・・・あ、なんだ、お前はリーフか。」

「え！　なんで知ってるんですか！？」

「ああ、銀次郎が楽しそうに話してたぞ。」

「そうですか。」

「わかったです。」

「じゃあな、あと俺の名前は荒木だ。」

第18話 スカイアローブリッジと、いつよりヒウンシティ

「ここがスカイアローブリッジです。」

「へー、・・・じゃあなんでこんなに歪んでるかな？」

「なんでも地震が起きてからこうらしいです。」

「じゃあ、サンヨウシティも・・・。」

「ええ、そうですね。」

「・・・どうしよう。」

「私にまかせてください。」

「...はい、わかりました。」

「あ、ヒウンシティ着きました。」

「おー、本当だ。」

「とりあえず...。」

「おらおら、もらっていくぜ!」

「あ、またロケット団っぽい人。」

「ロケット団っぽいじゃなくて正式なロケット団だよ!」
「えゝ、本当に?」
「このマークをみる!」
「俺、よく解かんない。」
「じゃあ、今から教えてやるぜ!」
「…遠慮しておきます。」
「いいのいいの、遠慮すんなよ。」
「じゃあ、バトルで勝ったらいいですよ。」
「おう、わかったぜ。」

「あ、やべえ。」
「これでか…。」
「と、見せかけてツルのムチ。」
「うわぁー、また負けたー!」
「…逮捕です!」
「あ、うわぁー、離せー!」
「あとで警察が説教です^^」

「なんかまた捕まえましたね。」
「これでちょっぴり安全です！」
「…そうですね。」

第18話 スカイアローブリッジと、いつよりハウステンデ（後書き）

やべえ、次どうしよう（・・――）

第19話 狭くなる世界

「・・・なんか昨日より静かじゃありませんか？」
「そうですねー。」

アナウンサー

「えー、情報によるとポケモンリーグがロケット団に制圧された
と...。」

「ええ！ まじかよ！」
「やっぱり赤井とやはらばいす。」
「銀次郎さん大丈夫ですかね？」
「さあ。」

「あ、ただ今ソウリユウシティが制圧されて...。」

「・・・モスギスさん。」
「とりあえずハウエンへ逃げましょう。」
「ハウエン？」
「そうですね、私の拠点だった地方です。」
「・・・だめですよ。」
「でもあのトレーナーは...。」
「俺たちがなんとかしないと。」
「そうだ、そのとうりだ。」
「あ、緑山さん。」
「まずはロケット団の赤井をどう潰すかだ。」
「さて、お前らにできるかな？」
「あ！ 赤井！」
「とりあえずこの地方を制圧してから次にシンオウを制圧する。」

「てめえ！」

「ちなみに銀次郎はどこかに逃げた。」

「って、この前俺を襲った人！」

「なんだ、…まあいい。」

「コノヤロ、俺様とバトルだ！」

「いいだろう、お前が俺に勝てるわけがない。」

「赤井はラプラスで緑山さんはドサイドンか。」

「うーん、微妙ですね。」

「ラプラス、ハイドロポンプ。」

ハイドロポンプはドサイドンに襲いかかり一瞬にして赤井が勝った。

「わかったか、これが格に違いだ。」

「くっ！」
「じゃあな。」
「

外伝 僕はチャンピオン（前書き）

銀次郎の外伝です。

外伝 僕はチャンピオン

僕は銀次郎、普段はゴールドとかシルバーって呼ばれてる。あらゆる地方を制覇していくつかの伝説のポケモンも持っている。今回は再びイッシュに来た。

その目的は関東最強のトレーナー『赤井』とバトルするため。それと失踪した『金澤』を探している。ついでに『荒木』も来ているらしい。

手持ち

ジョウト最初の三匹の最終進化系

ピカチュウ（ギザミミ） セレビィ ホウオウ
その他もろもろ

ヒウンシティ

ただいまヒウンシティに到着しました。

「よし、着いた、まずはアララギ博士に報告しないと。」

「よお、久しぶりだな、銀次郎。」

「ああ、久しぶり、荒木。」

「早速勝負だ！」

「おう！」

結果はもちろん僕の勝利。

「くそつ、勝てない。」

「荒木も強くなってるよ。」

「そうだといいいんだが。」

「ふう、あとは赤井と金澤か、・・・そろそろ寝るか。」

「ああ、もう朝か、母親に起こされなくていいな、旅は。」

リゾートデザート~~~~~

「・・・あ、ブラック、久しぶり。」

「久しぶり、銀次郎。」

彼はブラック、すでにイッシュのチャンピオンだ。

「で、ここになにしてるの？」

「うん、実は最近ここがおかしいんだよ。」

「おかしい？」

「うん、シンボラーがいなくなったり、『ファイヤー』が出没する

ようになっただよ。」

「ファイヤー？ それって赤井しか持つてないはず。」

「まあ、それは彼がいるとしか考えられないけど、シンボラーが不自然だよ。」

「まあ、そうだな。」

「もしかしたらいわるプラズマ団的なのがいるかも。」

「とりあえず僕はP2ラボを調べるよ。」

「わかった。」

こうして銀次郎の目的が1つ増えたのであった。

外伝 僕はチャンピオン（後書き）

i - フィルターめ・・・

外伝 地下に眠る秘密

P2ラボ~~~~~

「・・・何にもないな、少し休むか…。」

銀次郎が壁によれかかった時！

ポチッ！

「え？・・・うわああ・・・。」

銀次郎はどこかに落ちた、そして・・・

ドンッ！

彼は勢いよく落ちたようだ。

「いててて・・・、なんだろうこの場所。」

そこは洞窟のような場所でいくつか水滴が落ちている。

「あ、道がある、行ってみよう。」

いりくんでとても寒い。

「よし、これで俺の計画は…。」

「あ、その声は赤井！」

「あつ！ 銀次郎！」

「ん？ なんかまずい……………」

「ああ、まずいさ。」

「お前、それは……………」

「ああ、そうさ、この石像で地震と津波を起こすのだ。」

「やめろ！ うりゃああああ！」

「うお！ このやろっ、だあああ！」

「うぐっ、これでもくらえっ！」

「ぐはあ、ぐ……。」

「よし、あとはこの『剣』を抜けば……。」

そのとき！ 石像が光だし……

「うわ！ まぶしい！」

「ふふふ、手遅れだな。」

「くそっ、せめて抜いてやる！ うっ、固い。」

「無駄だ、今頃地上では地震と津波が起きている。」

「そんな……。」

これが、震災の謎の一部でした。
なお外伝はつづきます。

外伝 地下に眠る秘密（後書き）

？と思った人は神秘の方も見るといいでしょう。

外伝 その後（前書き）

すみません、

昨日はいろいろ事情があつて投稿できませんでした。 > (|) <
あと日記形式です。

外伝 その後

僕は赤井の野望を止められなかった。

カノコタウンは全壊、カラクサタウンはおかしな事になった。
ほかの場所もおかしいらしい。

それから数か月後

カノコタウンに一番詳しい人に聞いても知らないという。
とりあえずブラックに報告しようと思ってライモンシティに向かった。

カラクサタウン~~~~~

一人の少女、じゃなくて少年が道に迷っていた、
本当は知らなかったが、案内した。

翌日

今日はまるで台風、そこで『トルネロス』を見た、少年にはなにも見なかったことにした。本当はこの場所にでないはずなのに・・・

翌日

今日は面白そうなので少年の様子を見ることにした、本当にアブソルがリーフブレードを使っていた。そのあとおかしな口調の人と話していた、すごく意外。

「……」

「……田舎がとびかえってる……」

外伝 その後（後書き）

銀次郎の外伝完結です。たぶん。

第20話 託された者

緑山敗北から数日後

「あーあ、まさかジム閉鎖なんて。」

「まったくです、最近活気ないですし。」

「だからと言って赤井にも勝てないですよ。」

「私も勝てませーん、強いです。」

こうして二人の間にも暗い空気が流れていた。
さらに数日後……

「え？ お届け物？」

「はい、銀次郎という人です。」

「銀次郎さんから！？」

「なんでしょうね。」

「開けてみましょう。」

中には銀次郎の帽子と一つのモンスターボールと手紙が入っていた。

「これは銀次郎さんの帽子か、手紙も入ってる。」

リーフへ

君がこの手紙を読んでは時には赤井に捕まってるかもしれないし死んでもかもしれない、でもこの手紙を読んでもということとはまだ安全な方だね、たぶんまだ赤井には勝てないと思うけどリーフには是非修行してほしい場所があるそれは東北地方だ、そこは強者が多いつわものモスギスさんもたぶんその地方出身だと思う頑張ってね

イッシュを救うために

銀次郎

「銀次郎さん…。」
「たしかに東北出身です。」
「そうなんですか。」
「いくんですか？」
「……はい、行きます。」
「じゃあ、レッツゴーです！」

こうして彼らは東北に旅立つことになった
緑山は・・・わからない。

第20話 託された者（後書き）

おそらく次話からアルタイル系の要素が強くなります。

第21話 一気に（前書き）

一気に物語を進めます。

第21話 一気に

というわけでまずは飛行機のあるフキヨセシティに向かった。

「その中のポケモン何ですか？」

「なんでしょうね、出してみましよう。」

ポン！

そのポケモンは虹色に包まれて出てきた、
いわゆるプレシヤスボールだ、
周りはざわついてる。

「…何これ、大きい。」

「は！ これは、これは！ あきら。」

「あきら！？」

「じゃなくて『アルセウス』でした。うっかりさんの私、むふふの
ふ。」

「話は銀次郎から全て聞いている。」

「うわ！ しゃべった！」

「これは『テレパシー』だ。」

「テレパシー？」

「そうだ、それよりも急がないのか？」

「へ？」

「東北だよ。」

「あ、そうだった、急ぎましよう、モスギスさん。」

「はい。わかりましたです。」

ライモンシティ~~~~~

話しによると、

カトレアという人から手違いで俺に届いたらしい、
ついでに『進化の奇跡』ももらってしまった。

…俺、そんなに女子っぽいかなあ。

6番道路~~~~~

急にウオーグルが飛んできた、
アルセウスによると子供の『ワシボン』を引き取ってほしいらしい
俺はすんなり引き受けた。

電気石の洞窟くくくくく

銀次郎さんらしき影を見たが、
すぐに見失った。

そして・・・・・・・・

「ああ、やっと着いた。」

「今日は飛行機でお休みルンルンです！」

「そうですねw。」

こうして彼らは東北に向かった・・・

第21話 一気に（後書き）

動画を見ながら書いたので結構遅くなりました。
・・・気をつけよう。

第22話 東北の博士

俺たちは疲れたのか眠ってしまった、
飛行機の中はかなり静かだ、
たまに子供が騒いでるが気にならない。

ハクジタウンの近くに飛行機がとまった。
ついに東北の旅が始まるのだ。

「起きてください、じゃないとThis is the penです!」
「ええ! て、ペンか・・・。」

おもわず起きてしまった、…行こう。

ハクジタウン~~~~~

周りは雪で覆われてる、
なんとも言えない町だ。

「まずはヒイラギ博士に会いましょう。」
「えーっと、…はい。」

というわけで研究所に向かった。

「どうも おひさです。」
「久しぶりだね、モスギス、あれ、その子は…。」
「リーフです。」
「リーフ君か、よろしく。」
「というわけで本題ですが…。」
「わかってるよ、イッシュの事件だろ。」
「そうです、今は赤井を倒せる人ほとんどいません。」
「銀次郎君は？」
「おそらく敗北して、幽霊になってるかものイカサマです！」
「え、それはまずいな…。」
「そこで！ リーフ君の登場です！」
「え、俺！？」
「そうか、たしかにこれなら…。」
「ちよっと待ってください、どという事ですか。」

「それを言ったら、ダメダメダメです。」

「え、でも…。」

「とりあえず今日は私の家で休んで、明日に備えよう。」

「そうですね。」

「わかりました。」

ヒイラギ博士の家で休むことになった、
明日、銀野^{ギンノ}が登場します。

リーフのパーティ（前書き）

だいたい『控え』の時は

→を表示します、きつと

リーフのパーティ

リーフ

「なんの企画ですか？」

杏

「お前のパーティの紹介だよ、現時点の。」

アブソル

メス 最近凶暴になってきた、
切り込み隊長。

技 リーフブレード 不意打ち メガホーン
挑発

ジャノビー 控え

オス 実はフキヨセシティに行く途中で進化した、
攻撃は苦手でもいつもサポートしている、
挑発されると怒らずに逃げる。

技 宿り木の種 光の壁 リフレクター
ミラーコート

ウォーグル

オス 暴れん坊に戻った、
しかも前より酷い、
なぜかバレットパンチが使える、
実は左利き。

技 バレットパンチ ブレイブバード
ドラゴンビート ギガインパクト

アルセウス

メス 強いが本人曰く神ではないらしい、
ほとんど通訳、温厚、暇人？
よくオスと間違えられる、
ある意味リーフと逆。

技 裁きのつぶて 滝登り 流星群
大文字

コジョンド

メス 10年ぶりぐらいに再会した
最高のパートナー、

技 猫騙し アクロバット 飛び膝蹴り
ストーンエッジ

ミロカロス

メス 美しい、そして強くなった、

技 ミラーコート ハイドロポンプ

吹雪 地ならし

パルキア

オス ウォーグルのせいで泣き虫になった、
意外と可愛い、リーフにいつも甘える、

技 あくう切断 波乗り

波導弾 吹雪

リーフのパーティ（後書き）

とまあ、こんな感じです、
後からも追加します。

第23話 元チャンピオン 銀野

ドンガラガッシャン！

「起きてください、暴れてます。」
「え。」

説明するとアブソルがワシボンを、
抑えて、ジャノビーは部屋の角で怯えてる、
アルセウスは気にせず眠ってる。

「はあ、片づけるか。」

翌日……

「どうしたんだい、目の下にくまができてるけど。」
「いえ、何でもないです。」

501番道路~~~~~

「次の町はアヤメシティですね。」

「アヤメシティですか、あ、看板になにか書いてる。
」
お得な掲示板

ポケモンセンターからの連絡です、
ポケモンが疲れたら、ポケモンセンターで、
回復させてあげましょう、
どうも もす でした ぴんぽんぽん。

「…モスギスさん。」

「いやあー、看板を見るとつい。」

「つい、じゃないですよ、二度としないで下さい。」
「はい、です。」

アヤメシティ~~~~~

「以外と近いですね。」
「そうですね、あ。」
「あら、モスギス、久しぶり。」
「モスギスさん、どんだけ顔が広いんですか。」
「あら、その子は。」
「リーフです、女子じゃないです。」
「え？ そうなの！？」
「そうですよ。」
「私は銀野よ。」
「ここで何をしてるんですかー？」
「いえ、特になんも。」
「また旅行ですか、いいですねー。」
「いえ、チャンピオンの座奪われたのよ。」
「誰にですか？ すごいナットレイですね。」
「そいつの名前は、プラントとか言う…。」
「え！？ それ父さん。」
「師匠、消火器、金字塔です！」
「父！？ 師匠？ ということ。」
「このまえ失踪したばかり…。」
「失踪って、ちょっと連絡してみる。」

「たしかにそうみたいね。」

「何で今まで隠したんだろう…。」

「まあ、言いくかっただのね。」

「このやろ。」

「師匠め、モスギスさん、もっと修行します！」

銀野は怒る理由がわからなかったが、
とりあえず気にしない、と言うことにした。

第24話 ジム戦 対雨菜（前書き）

アマナ戦です、あえて分かりやすいようにカタカナで書きました。

第24話 ジム戦 対雨菜

「…ジム戦か。」

「相手は虫タイプ使いです。」

「虫タイプですか。」

そう、相手は虫、アブソルやジャノビーには、かなり不利、ここはワシボンが打倒か。

アヤメジム~~~~~

「はい、挑戦者ですね、お願いします。」
「こちらこそ。」

雨菜はクヌギダマを出してきた、
こっちはやはりワシボンだ。

「ワシボン！ 翼で打つ！」
「クヌギダマ！ 鉄壁。」

クヌギダマはかなり固くなった、
ワシボンはそうとう痛そうだ。

「そう簡単には行きませんよ。」

「じゃあ、バレットパンチ。」

ワシボンはとてつもない速さで攻撃、
クヌギダマは思わず鉄壁を解いてしまった。

「こうなったら、自爆！」

「自爆！？　ワシボン、逃げろ！」

クヌギダマは光だした、
射程距離は広く、ワシボンは、
逃げ切れなかった。

「く、きついな…。」

「さあ、次はどうしますか？」

リーフはアブソルを出した、

アルセウスは出したくないのだろうか。

「アブソルですか、こっちはダンゴロウです。」

「アブソル！　リーフブレード！」

リーフブレードが命中したのはいいが、
道具の『ゴツゴツメット』で体力が削られていく。

「次はこっちの番です、岩落とし！」

アブソルに岩が直撃！　しかし平気そうだ。

「ええ！　何で平気なの！？」

「進化の奇跡ですよ。」

ライモンシティでもらった、
進化の奇跡が役に立ったのだ。

ついでにアブソルはディザゾルの進化前です。

「進化の奇跡、面白い物をもっていますね、
ダンゴロウ！ 虫食い！」

アブソルに襲い掛かる、しかも弱点だ。

「アブソル！ リーフブレード！」

急所にも当たりダンゴロウは倒れた。

「ツボツボ、出番です。」

「ツボツボか……」

ツボツボは防御、特防最強クラスのポケモン、
恐ろしい。

「アブソル！ リーフブレード！」

「ツボツボ、ジャイロボールです。」

もちろん威力はツボツボの方が上、
進化の奇跡はあるが耐えきれなかった。

「さあ、次です。」

「ジャノビー、行ってこい！」

「妙に自信ありそうですね、ツボツボ、

原子の力！」

「ジャノビー！ 光の壁。」

ジャノビーの光の壁は完全に攻撃を防いだ。

「宿り木の種！」

耐久型には痛い技だ。

ツボツボは苦しんでいる。

「こうなったら、まずはトリックルームです。」

トリックルームは素早さが逆転する技、
もちろんツボツボの方が速くなる。

「次にパワートリックです。」

パワートリックは攻撃と防御を、
入れ替える技、これは強烈である。

「ツボツボ、ジャイロボールです！」

とてつもない速さの塊が襲い掛かってくる！
ジャノビーはリフレクターをしたが強すぎた、
ジムの壁を破壊した。

「最後のポケモンですね、何ですか？」

「…アルセウス！」

アルセウスは出てきた、

どうやら話にならないらしい。

「そんなポケモンを隠し持っていたなんて、ツボツボ！ ジャイロボール！」

トリックルームの速さも加わって、アルセウスにぶつかったが、何ともない。

「ツボツボ、パワートリックです。」

ツボツボは防御を戻したが、滝上りにあえなく惨敗。

「負けました、エナトルバッジあげます。」

「ありがとうございます。」

第24話 ジム戦 対雨菜（後書き）

今日社交ダンスで男子と踊られました、
このやろっ！ あー！ このやろっ！

第25話 親と子 そして弟子

「いやー、良かったですよ。」

「そんな、まだまだです。」

リーフたちがジムを出たとき、
人が立っていた。

「久しぶりだな、リーフ、モスギス。」

「あ！ 父さん！」

「師匠！」

「銀野から聞いて駆け付けた。」

「何で隠してたんだよ。」

「いやあ、言いくくって…。」

「まあ、生姜が納豆を食べたように、粘って…。」

「相変わらず意味分かんねーなあ。」

「酷いです、いつも。」

「いつも？ 昔からこうだったの？」

「ああ、そうだ、こうだった。」

リーフはキャラだと思ってたが、
性格のようだった。

「あ、そうだ、勝負しませんか、師匠。」

「そうだな、久々にするか！」

モスギスはミカルゲ、父はラフレシアを出した。

ミカルゲは影分身をして見事に毒の粉を避けた、

だが、それを読んでいて、あらゆる場所に毒の粉を、

撒いていた、明らかに毒の色をしてるのがミカルゲなので、

ミカルゲに、ソーラービームを撃って倒した。

「負けたです、しょぼん…。」

「結構良かったけどな。」

「うわっ、こんなに強いんだ。」

「まあ、弟子に負けられないからな。」

「じゃあ、何でブラックなんかにチャンピオンを…。」

「ああ、ブラックの方が強いからな。」

「まあ、そりゃあ、そうか！」

「あ！ ひでえ。」

「俺が勝てる訳もないけど。」

「諦めるなよ。」

「分かってるよ。」

父は後ろを向いて言った。

「お前は俺を越えられる、だから俺に早く勝ってくれ

いいか、よく聞け、合言葉は、

イッシュを救うために、

だぞ。」

「それ銀次郎さんの手紙にも書いてたよ。」

「なんだ、そうか、銀次郎のやつ読んでたな。」

「え、知ってるの？」

「ああ、友人だ。」

「そうだったのか…。」

「じゃあな。」

父は去って行った、だが嬉しそうだった、
気がした。

第26話 乱入

503番道路くくくくくくくくくくく

「あ、撮影してる。」

「そうですね…。」

「あ！ モスギスさん、どこに…。」

「もーももーす、どうも もす です。」

「誰ですか！ あなたは！」

「だから もす です。」

「今生放送ですよ！」

「関係無いです。」

「とにかく見学ならあつちで見てください！」

「見学じゃ無いでしたー！」

「モスギスさん！ 何をやってるんですか！」

「全国の人々に教えるです。」

「え？ 何を？」

「この人がイッシュを救います。」

「ええ！」

「本気でーす。」

「とにかく進みますよ。」

「モスギスさん、もっとでちゃうもんっ！」

「アホかー！ コラー！」

「あのー、中継おわってますけど。」

「そうなんですか、残念…。」
「なんか、すみません。」
「いえ、特に問題は無いですけど。」
「あー、よかった。」
「レッツゴーです!」
「はい、そうですね…。」

こうしてモスギスは有名になった、
かもしれない…。

第26話 乱入（後書き）

新王地方で飽きれてる人がいます。

第27話 ミルシティ（前書き）

電話

か、

電話。

第27話 ミルシティ

「あ、着きましたです。」

「結構温かいですね。」

ここはミルシティ、
雪が少ない町だ。

「今日は休んで、明日挑戦しましょう。」
「そうですね。」

翌日・・・・・・・・

「よし！ ジム戦だ！」

ぶるるるるる・・・・・・・・

「おっと、電話のキララちゃんです！
・・・

どうも もす です。」

「ちょっと、モスギス、見たわよ。」

「え！ 私の若い頃ですか？ 恥ずかしいです。」

「なっ！ 違うわよ！ テレビよ！ テレビ。」

「あー、いわゆる、乱入…。」

「昨日イツシュを救うとか言ってたけど。」

「あー、リーフ君の事ですね。」

「君？ ということは男子？」

「そうえすけど。」

「えー！ 超意外。」

「あー、そういうことはあまり言わない方が…。」

「聞こえてますよ。」

「あー、やっちった。」

「あ、ごめんごめん。」

「別にいいですけど。」

「で、今何をしてるんですか？ わくわく。」

「新人トレーナーがポケモン食べようとしてるのよ、

だから心配で付いて行ってる。」

「そうなんですか、大変ですね。」

「そうなのよ。」

「俺…、絶対全国の人から誤解されてる。」

「大変ね、付いて行ってる子も。」

「？ どういうことですか？」

「あ、いや、なんでもない、じゃあね。」

「ばいばい〇ーンです！」

「…それアンパ〇マンのあれじゃないですか。」

「そうかもだったりです。」

リーフは、
…頑張っ
て気にし
ない！

第28話 ジム戦 対名木南多（前書き）

ユニーク1000突破いたしました！
みなさん、ありがとうございます。

第28話 ジム戦 対名木南多

「ふん、こんなちっこい少女か。」

「女子じゃないですよ。」

「いや、少女だ。」

「違います。」

「じゃあ、勝負で証明してもらおうかのう。」

俺はアブソルを出した、名木南多はサイホーンを出した、サイホーンは岩雪崩を出したがアブソルは避けて、リーフブレードをだした、サイホーンは一発KO、

「むう、やるのう、エビワラー、出番じゃ。」

俺はアブソルを戻してワシボンを出した、
エビワラーはマッハパンチ、

ワシボンはバレットパンチを出した、
スピードはほぼ互角、持久戦になった、
ていうか殴り合いである、

ワシボンは隙を突かれてモロくらった、

「エビワラー、とどめの雷パンチじゃ。」

「ええ！ 飛べ！ 危ない！」

ワシボンは雷パンチをくらったが、
光だして…。

「あ、…進化する。」

「なぬう！」

そこには大きく、勇敢そうな鳥が居る、
ワシボンはウォーグルに進化したのだ、
ウォーグルは小さくうなずいた、

「ウォーグル！ バレットパンチ！」

「エビワラー、マッハパンチじゃ。」

ウォーグルのバレットパンチは異様に早い、
エビワラーは倒れた。

「くっ、次はダグドリオじゃ！」

名木南多はなぜかモンスターボールを
地面に埋めはじめた、

俺は混乱したが、とりあえず上空に移動させた、

「ダグドリオ！ 辻斬りじゃ！」

ダグドリオは飛びはじめた、
…足あんななんだ、

「ウオーグル！ 翼で打つ！」

両者はぶつかりあった、ウオーグルは、
今までの疲労もあつて、倒れた、

「ジャノビー、出番だ。」

ダグドリオは辻斬りをしてきた、
しかし、リフレクターでガードした、
その隙に宿り木の種を植えた、
ダグドリオの体力はじわじわ削れていく、
そして、ダグドリオは力尽きた、

「本当に男子みたいだな、うむ、このアルネブバッジ、
持って行け！」

「ありがとうございます。」

そして………

「そうだ、これあげます。」

「え？ 何ですか？ これ。」

「その名も！ ピントレンズです。」

「ピントレンズ？」

「そうです、急所に当たりやすくする道具です、アブソルを攻撃的にするならこれですよ。」

「ありがとうございます。」

「どうもです。」

ちよつと雑談（前書き）

ミルシティでの、雑談です。

ちよつと雑談

モスギス

「リーフさん、この地方の最初の三匹しってますか？」

リーフ

「いいえ、分かりませんけど。」

モスギス

「リープン、アクタシ、ファマーです。」

リーフ

「そうなんですか、他の地方ではこの地方の
事すら聞きませんけど。」

モスギス

「実は人気無いんですよ。」

リーフ

「そうなんですか！？ 結構いい所なのに。」

モスギス

「そうなんですよ、まあ、別名『隠れたバトルの聖地』です。」

リーフ

「この地方にピッタリですね。」

モスギス

「そうですね、あと、昔の事件しってますか？」

リーフ

「事件？」

モスギス

「そうです、D・H団事件ですよ。」

リーフ

「D・H団ですか、ロケット団みたいですね。」

モスギス

「そうですね、結局消えてみんなハッピー、

ラッキー、機械のギギアルです！」

リーフ

「じゃあ、イッシュは…。」

モスギス

「さあ、どうでしょうね。」

リーフ

「うーん、…。」

モスギス

「あ、501番道路付近にリオルよフロンいましたよね。」

リーフ

「そうですね。」

モスギス

「捕まえに行きましょう。」

リーフ

「ええ！ 今夜ですよ。」

モスギス

「モスギスさん、行ってきまーす。です。」

リーフ

「あ、行っちゃった、大丈夫かなあ。」

ちよつと雑談（後書き）

この後帰ってきました、
リオルは捕まえられなかったですが…。

第29話 白奈

シオウシティ~~~~~

「着いたです。」

「はあ、まさか岩砕きがいるなんて。」

「2時間探しましたね。」

「とりあえず休みましょう。」

ポケモンセンター~~~~~

「はい、わかりました。」

「ふう、これでよしと。」

「あら、リーフ君じゃない。」

「あ、白奈さん、お久しぶりです。」

「どうも もす です。」

「あ、モスギスか。」

「知ってるんですか？」

「ええ、友人よ。」

「あなたこそ何で知ってるんですか？」

「まあ、イッシュにいる前は新王にいました。」

「新王地方ですか、結構この地方に似てますね。」

「結局ブラックやカイセーと周りの人たちがチャンピオンに…。」

「でも次はあなたの番です、魔人がお願い、届いて、お腹。ぽん！」

カイセーはD・P・Pの男主人公です。

「俺！？ まさか。」

「いいえ、できるわよ。」

「まあ、そういうことにしておきます。」

「そうだこの町のジムリーダー、水タイプ使いだから。」

「水タイプですか、じゃあ、アブソルですね。」

「まあ、ジャノビーは攻撃技持ってないです。優しい草タイプ。」

「何でアブソルなの？」

「ジャノビーは攻撃できませんし、アブソルはリーフブレード使えます。」

「ああ、アララギ博士から聞いたわ。」

テレビ

「速報です、今新王地方が大洪水で…。」

「ええ？ 洪水！？」

テレビ

「原因はトレーナーのヒンバスで、

あまりにも危険ということで、回収されました、それに関して世間からものすごい批判が…。」

「…悲しいだろうね、トレーナーには。」

「白奈さんなら何とかできませんか？」

「流石に無理よ。」

「そうですか…。」

第30話 ジム戦 対紀里 前半（前書き）

昨日色違いのミネズミを捕まえました、
嬉しいのやら悲しいのやら（泣

第30話 ジム戦 対紀里 前半

「ここがシオウジムですか。」

「気を付けてください、シエルダーから……。」

「うわああああ。」

ドボン！

「はぁーつくしゅん！」

「もっと早く言うておくべきでした、もぐもぐ。」

「そうですよ……。」

「あ、挑戦者のかたですか？」

一人の少女がやって来た。

「はい、そうです。」ブルブル

「怖くて震えてるのですか？」

「いいえ、さっきプールに落ちたんですよ。」

「プールに？ ああ、シエルダーですか。」

少し馬鹿にされてるような気がした。

「あれ？ リーフ君年下に敬語でいいの？」

「あ、そういえば、モスギスさんのせいで敬語に…。」

「まあ、いつもの喋り方になっているのね。」

「あ、白奈さんだ！」

「そうよ、暇なのよ、このバトル拝見させてもらっわ。」

「そろそろバトル始めましょう。」

「そうですね。」

俺はアブソルをだした、紀里はスターミーを出した、アブソルには格好の獲物だ、

「アブソル！ 挑発。」

実は覚えていた、いつのまにか、

スターミーは怒りだした、コアが凄く光っている、

スターミーはシグナルビームを出した、

若干当たったが不意打ちで仕留めた、

「お疲れ、スターミー、フローゼル、出番です。」

浮き輪？　のような物を付けている、
フローゼルは、スプラッシュを出した、
とてつもない泡が襲い掛かってくる！

第30話 ジム戦 対紀里 前半（後書き）

なんかジム戦のスピード早くなってるような…、
まあ、いいか！

第31話 ジム戦 対紀里 後半

アブソルはスプラッシュで倒れた、俺は、ウォーグルを出した、

フローゼルは、冷凍ビームを出した、ウォーグルは、回避して、

翼で打つをしたが、ビルドアップで耐えた、

「水タイプだからバレットパンチは効きにくい、どうすれば…。」

その間にもウォーグルは、攻撃され続けている、

その時、ウォーグルは騒ぎ出した！
フローゼルは苦しんでいる。

「この技は、『ドラゴンビート』よ！」

特殊 威力120 命中90

追加効果 攻撃上昇 確率40%

ウォーグルの攻撃は上がり続ける、
フローゼルは動けない、

「ウォーグル！ 切り裂く！」

フローゼルは倒れた。

「ありがとう、テペトラー、出番よ！」

河童のような姿で、お腹は黄色いくて、
細い黒の横線がある、そして赤いバツのがある、

テペトラー

タイプ 格闘？ 水

波動弾を受けたが翼で打つで一撃、

紀里はレクオレを出した、

俺はウオーグルを引っ込めて、

ジャノビーを出した、

レクオレ

タイプ 水

全体的に青で、アメーバみたいな感じ、

目は黄色い、胸の辺りに赤い宝石のような物がある、
形は若干人、

レクオレは催眠術を出した、

そしてヘドロ爆弾、ヘドロ爆弾、シャドーボール、
なんとか耐えて起きた、そして宿り木の種を植えた、

「よし、今度こそ、ジャノビー！ エナジーボール。」

ジャノビーの手元には緑色の球体が出てきた、
しかし無くなった、

レクオレはヘドロ爆弾を出したが光の壁でガードした、
しかし隙を突かれて倒れた、レクオレと同時に。

「はい、ファクトバッジです。」

「ありが…、はぁーつくしよん！」

「あーあ、風邪を引いたのね。」

外伝2 ブラック（前書き）

b w主人公のブラックの外伝です、

： え？ 何で漢字にしていなかった？

それはイッシュ地方がニューヨークだからですよ。

（注：本当です。

あと今日投稿したのはプロローグと
思ってください。

外伝2 ブラック

僕はブラック、チャンピオンだ、
まあ、赤井に負けて今はただのトレーナ、
そんな訳で後は杏さんよろしくっ！

はあ！？ 何でだよ。

だつてえ、めんどくさいんだもん。

おい、キャラ誰かと被ってるぞ。

わかったよ。

「ブラック、早くう。」
「待つてよ、今行くから。」

当時僕は7歳、
ベル、チェレン、ホワイトが親友だ。

「はい、お待たせ。」
「遅いぞ。」
「ははは、悪い悪い。」

僕は笑いながら行った、
そしてサンヨウシティの、
トレーナーズスクールに行った、

10歳以下はレンタル式になっている、
自分で持っている人もいるがスクールの
外では禁止されている、

昼休み：

「勝負よ！ ブラック！」

「ああ、そうだな！ ホワイト。」

ブラックはミネズミ、ホワイトはマメパトを出した、

結果は引き分け、いつもどおりだ、

こうして暮らしていた。

外伝2 ブラック（後書き）

これは、今から10前の話です。

外伝2 転入生（前書き）

翌日、

外伝2 転入生

「はい、今日は新しい友達を紹介します、来週から来るそうです。」

「おお。」「まじ!?!」「ちえつ。」「わくわく。」「ふーん。」

「男の子だそうです。」

ベル

「へえ！ 楽しみだね、ブラック。」

「そうだな。」

チエレン

「俺どこに住んでたか聞いたぞ。」

ホワイト

「知ってたの?」

チエレン

「うん、新王地方らしい。」

ベル

「へえー、じゃあ、ここは温かいね。」

「ぐうー、むにゃむにゃ。」

チエレン

「おい、起きろ、ブラック。」

「え？ 寝てたの？」

チエレン

「まったく…。」

チエレンが飽きた顔で言った。

一週間後、

「入って来て！」

がらがら

そこには緑色の髪で三つ編みつばい髪型の少年？ が教室に入ってきた。

「おい、女子じゃねえかよ。」

「そうか！ 妹だな。」

「なによ！ 先生の嘘つき！」

「どうも もす です。」 ↑モスギス、紛れ込んだ

「かわいいじゃねえか。」

「本当に男子？」

「キヤー、かわいい！」 ↑ベル

「みんな勘違いしてる、ベル以外は。」

→チエレン

「すげえな、ベル！」 ↑ブラック

「ほーう。」 ↑ホワイト

「えーっと、自己紹介して。」

「リーフです、よろしく願いします。」

「やっぱ女子じゃねえか！」

「声もかわいいな。」

「あーあ。」 ↑チエレン

「何でベルには男子って解かるの？」

→ブラック

「うん、何と無く」 ↑ベル

「じゃあ、ベルの右の席ね。」
「はい。」

外伝2 転入生（後書き）

あ、リーフも出てた、
じゃあリーフの外伝も兼ねて、
で。

外伝2 親友（前書き）

ちなみにリーフは早生まれです、

外伝2 親友

翌日、

昼休み：

ベル

「あ、リーフ、友達になろう！」
ブラック

「早すぎるな、おい。」

チェレン

「流石に早すぎるだろ。」

ホワイト

「流石ベル！」

ベル

「えへへ♪」

リーフ

「…うん。」

ブラック

「おお、すげえ。」

こうして意気投合した、

ベル

「何かポケモン持ってるの？」

リーフ

「うん、持ってる。」

ポン！

ブラック

「コジョファーか。」

ベル

「バトルしようよ。」

リーフ

「うん。」

ベルは、ミジュマルを出した、

コジョファー、ミジュマルははたくをした、

どうも もす です、

じゃなかった、

お互い互角、

そしてリーフが勝った、

ベル

「強いね。」

リーフ

「ありがとう。」

ブラック

「あれ、顔真っ赤。」

チエレン

「勝の初めてなのか？」

リーフ

「うん。」

ホワイト

「よかったね。」

外伝2 事故（前書き）

モスギス

「モスギスさん、ドツキドキ！」

外伝2 事故

翌日、

放課後、
帰宅の途中、

カラクサタウン~~~~~

ベル

「だよね!」

リーフ

「うん。」

リーフとベルは二人で帰っていた、
ブラックたちは遅れるらしい。

「うおりやあー！」

急に一緒に歩いていた
コジョフーが道路に投げ出され…

車に引かれた

リーフ

「あ…。」

ベル

「ちょっと、まちなさい！」

ブラック

「おい、どうしたんだよ。」

チエレン

「警察だ！ 警察よべ！」

ホワイト

「キャー！」

…ざわざわ…ざわざわ…
…ざわざわ…ざわざわ…

チエレン

「医者はい！」

男性

「はい、私です。」

チェレン

「このポケモンを。」

状況の説明

ベルとホワイトは犯人を追いかけている、

チェレンは冷静に医者と会話、

リーフはショックで固まってる、

ブラックはリーフの親の場所へ、

決している状況ではない、

数分して父親が来た、

プラント

「おい！　大丈夫か！」

リーフも倒れていた、

外伝2 悲しみとトラウマ（前書き）

やべえ、いつまでやってんだ俺…。

外伝2 悲しみとトラウマ

翌日、

リーフは泣いていた、静かに、
なぜかベルも悲しんでいた、一緒に
犯人は捕まった、

何でもシルクハットの人が捕まえたらしい、
どうも もす です、とか言ってたらしいが、

コジョフーは重症、リーフが16の頃に
なるまではリハビリも兼ねて良くならないらしい、

ブラックたちが励ましてくれたので
立ち直ったがポケモントレーナーはしない、
と想った、

そして、二年後、

夕方、

コンコン

リーフ

「はい。」

ベル

「ちょっと話があるんだけど。」

リーフ

「うん。」

リーフ

「え？ 旅に出る？ 頑張つてね。」

ベル

「リーフも行くのよ。」

リーフ

「え。」

ベル

「当たり前よ。」

リーフ

「…親に言つたの？」

ベル

「言つてないよ。」

リーフ

「ええ！ 何で？」

ベル

「どうせ止められるもん。」

リーフ

「うーん、…考えとくよ。」

ベル

「ありがとう。」

その日の夜、

プラント

「ほう、旅にでるのか。」

リーフ

「でもポケモンは持たない。」

プラント

「だめだ。」

リーフ

「俺はトラウマなんだよ。」

プラント

「…せめて俺のシェイミぐらい借りてけ、
じゃないとだめだ。」

「うう、
リーフ
分かったよ。」

外伝2 悲しみとトラウマ（後書き）

今日はここまで！

結構衝撃的。

外伝2 モスギス並みのテンション（前書き）

ブラック視点に戻ります。

ちなみに昨日のやつのは続きは他外伝で。

外伝2 モスギス並みのテンション

1番道路、

ベル

「どう？ ブラック、捕まえた？」
ブラック

「えーっと、ミネズミかな。」

テレレレーテレレ、
テレツ、

チエレン

「あ、ライブキャスターが鳴ってる。」

アララギ博士

「ハーイ！ みんな元気？」
ベル

「はい、みんな元気です。」
アララギ博士

「そう、今カラクサのポケモンセンターにいるの、案内するから早く来てね！ じゃーねー！」

ブラック

「：テンション高いなあ。」

チェレン

「まっただ。」

ベル

「さあ、みんな、早く行こう！」

リーフ

「うん。」

ブラック

「そうだな。」

ポケモンセンター、

アララギ博士

「はい、案内しますね。」

ベル

「はい。」

チェレン、ブラック、リーフ

「はい。」

アララギ博士

「なんと、ここでは寝泊りしたり、
ご飯をたべられたり、ポケモンの回復、
休憩もできるの、しかもご飯以外は無料！
トレーナーの味方だよねー。」
ベル

「すごい！」

チェレン

「便利だな。」

ブラック

「おお！」

アララギ博士

「次はボックスについてよ。」

四人組

「はい。」

アララギ博士

「ボックスはポケモンや道具を交換したり、
遠くの人とやり取りしたり、
ここから回復させることができるの、

次はフレンドリィショップ！

ここでは色々な道具が買えるの、
買いすぎて食事代無くないでね！」

ブラック

「大変だな……。」「
ベル

「気を付けまーす！」

チェレン

「お前が一番心配だよ……。」「
リーフ

「俺は、
…まあ、
いいか。
」

外伝2 モスギス並みのテンション（後書き）

あ、ホワイトはもう旅に出てました、
これはうっかり。

外伝2 N（前書き）

注：ネタバレを含みます。

Nの本当の名前の可能性が高いです、
バスケットボールに書いていたので。

外伝 2 N

僕たちはあの後ベルとリーフは一緒に行って

チエレンと僕は…

チエレン

「おい、ブラック、何か演説してるぞ。」

ブラック

「何だ？」

ゲーチス

「今日お話しするのは『ポケモンの解放について』です。」

「え？」「解放!？」「まじ?」

????

「はっはっは、そんなん目的がばれだぜ!」

チエレン

「あ、リーフのお父さん。」

ゲーチス

「ほほう、それは何ですか？」

プラント

「それは、『自分だけポケモンを使ってこの地方の独裁者になる』だろ？」

・・・ざわざわ・・・ざわざわ・・・
・・・ざわざわ・・・

ゲーチス

「むう、酷い言いがかりですね。」

プラント

「言いがかりじゃないさ、

それをブラックが証明するだろう、なあ、『弟』。」

ブラック

「ええ？ 弟！？」

ゲーチス

「まあ、確かに兄弟です。」

プラント

「ナチュラルは元気にしてるか？」

ゲーチス

「そこにいますよ、だいたい本名で呼ばないでください。」

プラント

「いいじゃねえかよ、別に。」

N

「久しぶり、プラントさん。」

プラント

「おう。」

N

「ところでその子たちは...。」

プラント

「ああ、ブラックとチェレンだ。」

N

「…ブラック君、君のポケモン何か喋ってるよ。」
プラント

「またまた〜。」

N

「本当だよ、さあ、君のポケモンの声、
もつと聞かせてくれ！」

突然ブラックは勝負を仕掛けられた、
なんとか勝ったが…

N

「そんな事を喋るポケモンがいるのか！？…」
プラント

「じゃあな！」

チェレン

「あ、…帰った。」

ブラック

「何て言ってたんですか？」

N

「その内教えるよ、じゃあね。」

Nは去って行った、

チエレン

「…変な人だな。」

ブラック

「うん、でもリーフの父とゲーチスって似てないね。」

チエレン

「そうだな、それはそうとして、

俺たちはどうする。」

ブラック

「うーん、じゃあ1人1人で。」

チエレン

「分かった、じゃあな。」

外伝2 イッシュを救って

僕は全てのバッジをゲットしてゲーチスを倒した、
リーフの父が言ってた事は本当だったようだ、
ただリーフはトレーナーにならなかった、

その後チャンピオンになったが

その数年後に僕の故郷は津波で潰れてしまった、

しかも赤井という人にチャンピオンの座を
取られて、酷い事になったいる、

こっそり銀次郎と会って話しによると

リーフがトレーナーに

なったのを知って嬉しかった、

おそらく今は東北地方にいるだろう、

モスギスという変な人と一緒に旅をしてるらしい、

…、あれ？ 昔会った事あるような、

まあ、気のせいだろう、

僕は新井さんにバックアップするように頼んだ、

これで安心、

あとモスギスという人は元四天王だったらしい、
凄く驚いた、

僕もいつか戦ってみたいと思った、

今は、修行している、
いつか赤井に勝つために。

外伝2 イッシュを救って（後書き）

ここで外伝2は完結します。

第32話 最高のパートナー（前書き）

あ、リーフはコジヨンドと
しか喋れませんでした、
これはうっかり。

第32話 最高のパートナー

ポケセン、

モスギス

「どうも もす です、もす です、
覚えてください。」

リーフ

「何やってるんですか、
あ、すみません、これはかくかくしかじかで…
でピーチクパーチクで…」

そして……

リーフ

「あー、疲れた。」

白奈

「大変ね。」

リーフ

「そうです、でもめげません。」

白奈

「あ、そうだ、いい事考えた。」

リーフ

「何ですか？」

白奈

「私と旅しましょう。」

リーフ

「ええ！」

白奈

「だって、年下がもすを世話してもあれでしょ？」

リーフ

「え？ 世話してくれるんですか？」

白奈

「そうよ。」

リーフ

「やったーーーーー！」

白奈

「そんなに大変なの？」

リーフ

「はい、大変です。」

白奈

「まあ、…任せて！」

リーフ

「はい、お願いします。」

翌日、

リーフ

「…という訳です。」

モスギス

「わかりましたです、よろしくです。でいじわる。ます。」

白奈

「ええ、よろしく。」

リーフ

「あ、俺のライブキャスターが鳴ってる。」

アララギ博士

「ハイ！ リーフ君、

コジョンドちゃんの治療終わったわよ！」

リーフ

「お！ やつと会える、…って進化してる！」

アララギ博士

「そうなのよ、じゃあ今からそっちに
送るから、それじゃーねー！」

リーフ

「やつと会えるのか、わくわく。」

白奈

「感動の再会ね。」

モスギス

「まさかかさかの再会の前の時間、
モスギスさん、ドッキドキのドクロッグが
ベノムシヨックです！」

数分後……

リーフ

「久しぶり！ コジョンド。」

白奈

「喜んでるわね、…。」

モスギス

「あれ、もしかしてもろい涙ですか？」

白奈

「それを言うなら涙もろいでしょ。」

モスギス

「そうでした！ これはうっかり。」

リーフ

「へえー！ そうなんだ。」

白奈

「え？ ポケモンと喋れるの？」

リーフ

「そうなんですよ、兄と同じで、
流石に父さんは信じてくれなかったですけどね。」

白奈

「それってもしかして『N』？」

リーフ

「『N』じゃなくて『ナチュラル』です。」

白奈

「そうなの、国民はみんなNっていつてゐるわよ。」

リーフ

「そうなんですよ、なぜか。」

第32話 最高のパートナー（後書き）

よっしゃー！ 本編再開つと！

第33話 波乗り

海底トンネル、

俺たちは海底トンネルに来た、
海は白奈さんのガブリアスで渡った、
もう何にが何やらである、
見かけによらない、
人もポケモンも、

アーシア島、

来る途中でヒンバスを捕まえた、
… 本当にこんなんがミロカロスになるのだろうか、
… 書くこと無いなあ、
もっと進めよう、

あ、道間違えた、

と、いう訳で戻る事になった、
はあ、

ヒスイシティ、

リーフ

「何で道間違えたんだろう。」

白奈

「まあ、とりあえず休みましょう。」

モスギス

「賛成からの、賛成です！」

リーフ

「そうですね。」

???

「お、久しぶり、モスギス。」

モスギス

「あ、ジャッキーさん、

おひさし陽射しが強くて肌荒れもすーんです！」

ジャッキー

「相変わらずだな。」

モスギス

「いやーん、そんなに褒めないでください、

顔から赤いピーーーーーです！」

リーフ

「初めまして、リーフです。」

白奈

「白奈よ。」

ジャッキー

「俺はジャッキー、

話しはモスギスから聞いている。」

リーフ

「何のですか？」

ジャッキー

「まあ、色々とな。」

モスギス

「イツシュ、待ってるよ！」

今！ モスギスさんが行くぞ————！」

一同

「・・・・・・・・・・。」

モスギス

「あはい、ダメでしたか、しよぼん・・・。」

ジャッキー

「君達も大変だね。」

リーフ

「はい、大変です。」

白奈

「そうね、大変ね。」

苦勞人の二人、ギャップのモスギス、
普通のジャッキー、
次回、またジム戦、
まあ、スピーディでいいや。

第34話 ジム戦 対凡咲 前半（前書き）

ハンザ戦です。

第34話 ジム戦 対凡咲 前半

いきなりだがジム戦が始まった、
凡咲はフォリキーを出した、
俺はジャノビーを出した、

『フォリキーはキリンリキの進化系です』

ジャノビーは宿り木の種を植えた、
フォリキーは、マジックコートではね返した、

「やべえ、どうしよう、エナジーボールは
未完成だし。」

「ははは、攻撃手段が無い様だな。」

フォリキーは踏みつけをした、
しかし痛そうだ、

実は『ゴツゴツメット』を持っていた、

「じゃあ、特殊で攻撃すればいい。」

しかし凡咲は計算違いをしたなぜならば……

ボタン！

「なぬ！

『ミラーコート』だと！……」

エナジーボールを捨て、
ミラーコート覚えさせたのだ、
これは白奈の

ミロカロスから教えてもらったのだ、

「ミルタンク、出番じゃ！」

俺はジャノビーを戻して、
コジョンドを出した、

「コジョンド！ 飛び蹴り！」

「ミルタンク、鈍い（のろい）だ。」

→卵技です、

鈍いは攻撃、防御を上げて、
素早さを下げる技だ、

「ミルタンク、ハートスタンプ。」

→卵技です、

コジョンドには痛い技だ、
コジョンドは戦闘不能になった、

第34話 ジム戦 対凡咲 前半（後書き）

ホワイトのソウリュウシティの
bgm感動、

第35話 ジム戦 対凡咲 後半

俺は、ウォーグルを出した、
ミルタンクは転がるをした、

…金銀の時は亜香音のミルタンクに
苦しめられたな、…懐かしい、

とまあ、昔話はこのあたりにして

転がるはウォーグルに当たった、
流石に安定した耐久、受けじゃないけど、
ウォーグルは、切り裂くで倒した、

凡咲は、ポリゴンZを出した、
そして悪巧み、悪巧み、悪巧み、
その間に攻撃、あと一発で倒せそうだ、
しかし、

「一発逆転！ 破壊光線！」

悪巧みで6段階特攻が上がってる上に、
特性『適応力』で威力2倍、

もちろん耐えられる訳がない、

俺は、アブソルを出してシザークロスで
止めを刺した、

凡咲は、ググズリーを出した、

ググズリー

グリズリーがモデルと推測できる、
体はほとんどが緑色、
耳や口、背中 of 辺りは白い、
尻尾の先は丸い、

タイプ ノーマル、格闘

俺は、アブソルを出した、
ググズリーは大地の怒りをした、
なんとか耐えた、そして

リーフブレード、直撃した、
しかしビルドアップをしてた、
が、急所に当たった、

そして………

ジャッキー

「おめでとう。」

リーフ

「有難うございます。」

モスギス

「ピントレンズがピント働きました。」

白奈

→ちゃんと

「
そうね。
」

第35話 ジム戦 対凡咲 後半（後書き）

何か、すごく悩んだ…

第36話 ポケモンレンジャー

俺たちはハクジタウンに戻った、

研究所、

ヒイラギ博士

「お、帰ってきたようだな。」

「??？」

「おう、変な人と女子二人か。」

モスギス

「変な人違いまーす、モスギスいますう。」

リーフ

「女子じゃないですよ。」

「??？」

「ああ、わりいわりい。」

白奈

「あなたの名前は？」

「??？」

「俺？ 俺の名前は奈都^{なつゆき}由貴だ。」

→はべガのライバルです

ヒイラギ博士

「彼は優秀なポケモンレンジャーなんだよ。」

モスギス

「そうだ！ タッグバトルしましょう。」

奈都由貴

「もしかして、また俺と組むの？」

モスギス

「そうなの！ 組むの！」

奈都由貴

「やだよ、もう。」

モスギス

「やだー！ 組むー、諦めないもんっ！」

白奈

「じゃあ、私はリーフ君と組みましょう。」

リーフ

「はい、分かりました。」

奈都由貴

「はあ、何か、もう…。」

モスギス

「やったー！ モスギスさん、嬉しい！」

白奈

「大変ね、奈都由貴君も。」

リーフ

「そうですね。」

モスギス

「レッツ、バトルでござりますー！」

奈都由貴

「あああああああ…。」

第37話 もすレンジャー再び

と、いう訳でタッグバトルをするハメになった、

普通の方の二人VSもすレンジャー

もすレンジャーの二人はメタゲラスとドラピオン
を出した、

メタゲラス

タイプ 鋼 地面

見た目はサイホーンに近い、
さらに鎧的な物を付けた感じ、

俺と白奈さんは、アブソルとシビルドンを出した、

ドラピオンはなぜかメタゲラスに投げつけるをした、

奈都由貴

「何やってるんですか！」

モスギス

「よく見てください。」

メタゲラスはすごく張り切っている、
『サンの実』を投げつけたのだ、

奈都由貴

「うおお、これはすげえ。」

モスギス

「ふふーん、こんなもんです。」

白奈

「これは、流石にヤバイわね…。」
リーフ

「うーん、…。」

メタゲラスの、メタルブラスト！

白奈

「シビルドン、フラッシュ。」

突然シビルドンが光だした、

リーフ

「ぐう、アブソル、今の内にリーフブレード！」

命中して急所に当たったが、
メタゲラスは防御の高いポケモン、
一撃では倒せない、

モスギス

「ドラピオン、シザークロスです。」

ドラピオンがアブソルに襲い掛かる、

リーフ

「アブソル！ 不意打ち！」

白奈

「シビルドン、アクロバット。」

二匹の攻撃が見事に当たって
ドラピオンは倒れた、

奈都由貴

「やべえ、と思わせて、アイスバーン！」

技 アイスバーン

特殊 威力80 命中95

追加効果 自分の特攻アップ40%

二匹に氷の様な物が襲い掛かる！

白奈

「シビルドン、火炎放射。」

シビルドンの火炎放射が勝利
メタゲラスに命中した、

リーフ
「止めだ！ リーフブレード！」

またまた雑談

バトルが終わって、俺たちは
オウニシティに向かった、
その間の雑談です。

モスギス

「あ、失敗か…。」

リーフ

「何をしてるんですか？」

モスギス

「…、はっ！ 何にも。」

白奈

「私見たわよ、恋愛ゲームしてたでしょ。」

モスギス

「あ、いや、白奈さんは彼氏とかいるんですか？」

白奈

「まあ、それは想像に任せるわ。」

モスギス

「私友人から聞きました、彼氏らしき人がいるって。」

白奈

「うん、そうよ。」

モスギス

「ええ！ あの破壊神ですか？」

リーフ

「破壊神？」

白奈

「まあ、そう呼ばれてるだけよ。」

リーフ

「…、俺じゃなくてその人が行けばいいと思いますが。」

白奈

「彼は『リーフ君じゃないと意味がない』って。」

リーフ

「あ、思い出した、ブラックが言っていました。」

白奈

「ああ、ブラック君ね。」

リーフ

「師匠とか…。」

白奈

「まあ、その通りよ。」

モスギス

「おお、色々しっくりびったりむふふのふ。」

リーフ

「まさかあの震災も…。」

白奈

「それは無いわ。」

リーフ

「そうですね、あはははは。」

モスギス

「あ、私一度バトルしました、この地で。」

リーフ

「へえ、どんなバトルをするんですか？」
モスギス

「・・・・・・・・・・。」

リーフ

「？」

白奈

「あ、まあ、それは置いて。」

リーフ

「???？」

第38話 進化 (そのこの見てる人、多分あってますよ)

俺たちはオウニシティのポケセンに着いた、

翌日、

モスギス

「あ、もう朝ですか、リーフ君はもう起きてるですね。」
リーフ

「なんじゃ！ こりゃあああああああ！」

遠くからリーフの声が、
大体予想つくと思うけど…

モスギス

「お、緊急事態のすっとなん。」

リーフ

「ちょっと、見てくださいよ！」
モスギス

「あ、何だ、ヒンバスがミロカロスに進化しただけか。」

白奈

「どうしたの？ 朝から騒がしいわね。」

モスギス

「ついに、ミロカロスがヒンバスに進化したです！」

白奈

「それは逆でしょ。」

リーフ

「まさかジャローダみたいだなんて…美しいって聞てたから、しかもミラーコート勝つてに覚えてたし。」

白奈

「で、どうやって進化したの？」

リーフ

「えーっと、分かりません。」

モスギス

「じゃあ、何か紛失したとか。」

リーフ

「はい、調べてみます。」

数分後…

リーフ

「あ、綺麗な石が無いです。」

白奈

「石？ 鱗じゃないの？」

リーフ

「いいえ、石です。」

白奈

「うーん、おかしいわねえ。」

リーフ

「え？ まさか石じゃなくて鱗なんですか！？ 普通は。」

白奈

「ええ、そうよ。」

モスギス

「……まあ、進化した訳だし、これで実践にだせますよ。」

リーフ

「そうですね！ 気にしない、気にしない。」

白奈はそれでいいのか、と思っていた、

リーフは結構動揺してる、

モスギスは何とも。

第39話 充実しすぎた修行

白奈さんがモスギスさんの世話をしてくれる
ことによってポケモンの修行が
大幅にパワーアップした、

アブソルはメガホーンを覚えた、

ウォーグルはブレイブバードとギガインパクトを覚えた、

コジョンドは飛び膝蹴りとストーンエッジを覚えた、

ミロカロスはハイドロポンプと吹雪を覚えた、

全体のレベルも凄く上がった、

ただ白奈さんはすごく疲れてるみたいだけど、

翌日、

モスギス

「あれ？ 白奈さんは？」

リーフ

「疲れてるみたいですよ。」

モスギス

「それは大変ですねー。」

リーフはお前のせいだ！ と思っていた、

リーフ

「とりあえずジムに挑戦です。」

モスギス

「おー！」

ジム、

空^{モク}と怜^{レン}です！

リーフ

「よろしくお願いします。」

空と怜はエアームドとリーフィスを出した、

リーフィス

タイプ 水草

見た目は体にガラスに壺のようなものに、
…まあ、後は知らない人は調べてください、

俺は、ウォーグルとミロカロスを出した、

ウォーグルはギガインパクトをした、
エアームドに直撃、
効果今一つのはずだが、

リーフ

「うわぁ、倒した、しかもジムの壁は崩壊。」

ミロカロスのハイドロポンプもリーフィスには効果が4分の一のはずだが、

体を覆ってた壺みたいなのは割れて、

地面にクレーターが、リーフィスは重症、

リーフ

「……………」

モスギス

「あたふた、あたふた、キヤー！」

空

「……………」

怜

「……………」

リーフ

「あ、そのう、えーっと。」

空

「気にしないでいいよ！ さあ、続けよう！」

リーフ

「はい！」

空と怜はユレイドルとトゲキッスを出した、
俺は後退をしてアブソルとアルセウスを出した、
が、

アブソルはメガホーンでトゲキッスは行方不明に、
アルセウスは流星群で恐ろしいことに、

リーフ

「あほかぁ！　ぼけええええええええええ！！！！」

被害報告

ジムは全壊、その周辺も跡形もない、

ジムリーダーの二人は何とか逃げ切った、

モスギスはなぜか無傷、

ジムリーダーのポケモンはドクターストップされた、

若干アブソルも巻き込まれた、

リーフも巻き込まれた、

トゲキッスは数キロ先で見つかった、

第39話 充実しすぎた修行（後書き）

リーフ

「ああ…、何か、もう。」

第40話 時の洋館 時の変（前書き）

文字数を調節するためにもう1話投稿します、

第40話 時の洋館 時の変

俺は大目玉をくらったが、
ジムリーダーがなんとかしてくれた、

とりあえずカラスバシティに着いた、

リーフ
「大丈夫ですか？ 白奈さん。」
白奈

「ええ、大丈夫よ…。」

モスギス

「心配ですねえ。」

リーフ

「……………」

白奈

「……………」

モスギス

「まあ、とりあえずポケセンで休んでてください。」

白奈

「うん、有難う。」

しばらくして…

モスギス

「はい、ここが時の洋館です。」

リーフ

「へえ、な

モスギス

「はい、ここが時の洋館です。」

リーフ

「へえ、何か凄いですね。」

モスギス

「それじゃあレッツゴーです！」

探索中・・・・・・・・

リーフ

「あれ？ さっきから同じことをしてるような……。」

モスギス

「そういえばそうですね、

……あ！ まさかかさかの『ディアルガ』だったりして！」

リーフ

「ディアルガ？」

モスギス

「そうです、時間をつかさどるポケモン。」

リーフ

「それって新王のポケモンですよね。」

モスギス

「そうです、でも一度ここにも現れました。」

リーフ

「誰が会ったんですか？」

モスギス

「まあ、星風という人が会いました。」

→アルタイル、シリウス、ベガの主人公です

リーフ

「すごいですね。」

モスギス

「そうです、

この天下無敵のモスギスさんが負けたんですから。」

リーフ

「でも父さんに負けましたよね。」

モスギス

「それは師匠だからですよ。」

リーフ

「そんなもんですか？」

モスギス

「そんなもんです。」

第40話 時の洋館 時の変（後書き）

忘れてると思いますが

一応リーフは銀次郎の帽子を被っています。

第41話 やっぱり暴れん坊（前書き）

今回からポケモンの鳴き声も表示したいと思います。

第41話 やっぱり暴れん坊

ポン！

リーフ

「どうしたんだ？ ウォーグル。」
ウォーグル

「ぐうおおおおお！！！」
ズゴオン！

ギガインパクトで壁を粉碎、

リーフ

「おい！ 壁を破壊するなよ！」
モスギス

「あ、でもそこ目的地です。」

リーフ

「え？ あ、ならいいや。」

と考えるしかなかった、

しかしその部屋はもの家の空、
何も無い、

リーフ

「・・・・・・はあ。」

モスギス

「…あ、ここに『白玉』があります。」

リーフ

「白玉？」

その時！ 部屋が揺れ出した！

リーフ

「うええ！ 何ですか？」

モスギス

「あー、これはまさかかりんとうの
デアルガかポルキアかも。」

リーフ

「それを言うならディアルガとパルキアでしょうが！」
モスギス

「そうともゆー。」

リーフ

「それどっかで聞いたことあるような…。」

部屋の中心に裂け目ができ、
何かが出てきた、

????

「グルルルル…」

モスギス

「あれはパルキアですね。」

リーフ

「あれがパルキアか……。」

ウォーグル

「ぐうおおおおお……！」

リーフ

「おい！　ウォーグル！」

いきなりウォーグルがパルキアにギガインパクト、

そして殴りまくる、パルキアは逃げ回る、

パルキア

「パるううううううう……（泣。）」

ウォーグルは攻撃を続ける、

近くにいればギガインパクトかブレイブバード、
遠くにいればドラゴンビート、そんな感じ、

リーフ

「やめんかい！　こらあああああ……！！！！」

モスギス

「やばいです！　この館崩壊します！」

リーフ

「はああああ！？　また大目玉くらうのかよ！」

ウォーグル

「ぐうおおおおお！！！！」

モスギス

「わー！ 逃げるです！」

リーフ

「待ってください！ ウォーグルが！」

パルキア

「ぱるううううう！！！」

リーフ

「戻れよ！」

モスギス

「キヤー！」

ずいずいずいずいずいずいずい...

リーフ

「うわあああああ！！！！」

パルキア

「ぱるううううう！！！！」

モスギス

「わー！ わー！ わー！ 大事な事なので3回言いました。」

ウォーグル

「ぐうおおおおお！！！！」

第42話 泣く伝説

???

「おい、起きろ。」

リーフ

「うーん、…。」

???

「おう、起きたか。」

リーフ

「あ、父さん、ここは。」

プラント

「時の館のあった場所の前だ。」

白奈

「大丈夫?」

リーフ

「はい、大丈夫です。」

白奈

「それはよかった。」

リーフ

「あれ? モスギスさんは?」

プラント

「それが見つからないんだな。」

リーフ

「モスギスさああああん!?!」

ズボツ!

モスギス

「はい! おやつ時間だよー!」

リーフ

「ってええ！ あ、お決まりネタか。」
モスギス

「あ、酷いです、ぶんぶん。」

リーフ

「ということはウォーグルは…。」

パるううううう！

遠くの方で聞こえた

リーフ

「………、まだやってんのか。」

モスギス

「凄いタフですね。」

白奈

「そうね。」

プラント

「そういえばリーフって何のポケモン持ってるの？」
リーフ

「えーっと、ウォーグル、アブソル、ジャノビー、

ミロカロス、コジョンド、アルセウスだな。」

プラント

「お前アルセウスなんかもってるのか。」

リーフ

「うん、ほら、出てこい。」

アルセウス

「何だ。」

プラント

「…銀次郎のだな。」

リーフ

「ええ！ 何で分かったの？」

プラント

「何と無く。」

パるうううううう！！！！

リーフ

「……………」。

モスギス

「ほら、みなさん、助けに行かないと。」

リーフ

「そうですね。」

白奈

「わかったわ。」

プラント

「おう。」

そして……………

パルキア

「パるううううううう（泣。」

ウォーグル

「ぐうおおおおお！！！！」

リーフ

「やめろ！ このどアホがーーーー！！」

ウォーグル

「ぐうう……」

ウォーグルはキョトンとしている、

パルキア

「パるう……（涙目。」

プラント

「凄いなお前。」

リーフ

「いつもの事だよ、まあ、今回は酷かったけど。」

モスギス

「で、パルキアはどうするですか？」

リーフ

「……せつかくだから捕まえましょう。」

白奈

「へえ、じゃあモンスターボール持ってるの？」

リーフ

「えーっと、……モンスターボールが一つですね。」

モスギス

「まさに一かそれを7+したものか！

いわゆる8！」

プラント

「普通に言った方が速いだろ。」

リーフ

「パルキアはどうなの？」

パルキア

「パるう。」

リーフ

「アルセウス。」

アルセウス

「ああ、いいよって言ってる。」

リーフ

「それは良かった。」

ポン！

リーフ

「……………ふう。」

白奈

「おめでとう。」

リーフ

「あ、初めて自分で伝説を捕まえました。」

プラント

「初めてはドキドキだよな、

シェイミの時もそうだったぜ。」

モスギス

「モスギスさん、まだ無い、しょぼん…。」

白奈

「あらら…。」

第43話 いろいろスルー（前書き）

また一気に進めます

第43話 いろいろスルー

リーフ

「え？」

サザンカ

山茶花

「だからジム破壊されたくないんで。」

リーフ

「修行の旅の意味ないじゃないですかー！
せっかく銀次郎さんが教えてくれたのに！」

山茶花

「銀次郎？ また厄介な奴を。」

リーフ

「…もしかして銀次郎さんも。」

山茶花

「知らないのか、

…そう銀次郎も破壊しまくってたよ。」

リーフ

「まさか他にもいないですよね。」

山茶花

「まだもう一人いるぞ。」

リーフ

「いえ！ もう結構です！」

結局戦わずゲッドした、

そして、すごく進んだ、

ミュウツー

「ふん、この私がねじ伏せてくれるわ！」

リーフ

「はいはい。」

ジム破壊、

リーフ

「あああああ、また破壊してしまった。」

ミュウツー

「・・・・・・・・。」

モスギス

「じゃあ、ついに四天王ですね。」

リーフ

「はい・・・・・・・・。」

シャクドウ
赤銅島、

リーフ

「よっしゃー！」

よくわかんないけど調子出てきました！」

白奈

「とうとう四天王ね。」

モスギス

「やっぱり違いますね。」

第44話 破壊と決戦の始まり

朴の木

「俺はホオノキ、中途半端ではいかんぞ。」

リーフ

「はい、お願いします。」

朴の木

「よし！ 出てこい！ ジバコイル。」

リーフ

「ウオーグル、ギガインパクト。」

朴の木

「鋼にノーマルだと！？ やっぱり馬鹿だな。」

ジバコイル

「ジバアアアア！！」

ジバコイルはどこかに飛んだ

その後もウオーグル無双、

部屋はボロボロ、

リーフ

「よっしゃー！ 次だ！」

白奈

「ちょっと冷静にならないとだめよ。」

リーフ

「あ。」

モスギス

「今朴の木さんを病院に連れて行きますです。」

白奈

「わかったわ。」

2人、3人、4人と倒した、
部屋は全壊したけど、

そして……

プラント

「お前……。」

リーフ

「ごめん、何か、その。」

プラント

「まあいい、さあ、早速始めよう!」

第45話 決戦！ 対東北チャンピオン（前書き）

いやゝ、もう10月ですねゝ、

ほぼ毎日更新して（いろいろカットしまくったけど
ついに父との対決、やっぱり破壊？

惨敗？ どうも もす です

第45話 決戦！ 対東北チャンピオン

プラント

「キュウコン、出てこい！」

キュウコン

「キュー。」

リーフ

「父さんが炎タイプ！？」

プラント

「俺だっていつまでも一つのタイプにこだわらないさ、
しかもこいつは夢特性のキュウコンだ。」

日が照りつける、

モスギス

「熱い！ なつい！ まさにポリゴンZIP！」

リーフ

「俺は、ミロカロスを出すよ。」

プラント

「水タイプとわいえこの天気は厳しいだろう。」

リーフ

「へへっ！ 俺のポケモンはその程度じゃないぜ！

あとミロカロス、破壊するなよ。」

プラント

「破壊？ できるかな？」

リーフ

「ハイドロポンプ！」

ミロカロス

「ミロオオオオオ！！！！」

ずううん！

プラント

「………はあ！？ 何なんだよ！ それ。」
リーフ

「あちゃー、また破壊しちゃったか。」

もちろん壁は壊れた、キュウコンは起き上がれない、

プラント

「くそっ！ じゃあナットレイだ！」
リーフ

「交代、コジヨンド。」

ナットレイは飛び膝蹴りで吹き飛ばされた、

プラント

「むっ！ むう、…ハハコモリ！ なんとかしてくれ！」
リーフ

「はい、ウォーグル、受け止めてブレイブバード。」

今度はクレーターが、破壊しまくる、

いっばうそのころ……

オウニシティ、

奈都由貴

「銀野さーん！」

銀野

「どうしたの？ そんなにあせつて。」

奈都由貴

「リーグがヤバイです！」

銀野

「やばいつて？ …まさか。」

奈都由貴

「はい、そのまさかです。」

銀野

「じゃあ私のラティオスに乗って。」

奈都由貴

「ありがとうございます！」

ポケモンリーグ、

プラント

「うおおおおお！ やめろオオオオ！

リーグがもたーーーーん！」

リーフ

「パルキア！ あくう。。」

????

「やめなさい！」

シュン！

リーフ

「誰だ！ って銀野さんか。」

銀野

「終わり、あなたがチャンピオンよ。」

リーフ

「あ！」

モスギス

「あ！」

銀野

「どうしたのよ。」

リーフ

「目的はイッシュを救う事だった。」

奈都由貴

「大丈夫ですか！ プラントさん。」

プラント

「大丈夫だ。」

銀野

「へえ、じゃあ早く行かないと。」

リーフ

「モスギスさん！ 白奈さん！ 急ぎましょう！」

モスギス

「OKです。」

白奈

「うん、ついでに皆もね。」

奈都由貴

「はい！」

プラント

「いわれなくても。」

銀野

「行かなかったらダメよね。」

こうして彼らの激闘が始まるのだった……

第45話 決戦！ 対東北チャンピオン（後書き）

ついに東北編完結！

第46話 植民地（前書き）

あ、今日から

〇〇〇↑消えます

「

」

その分説明が増えると思いますので、
そんな感じです。

第46話 植民地

俺たちはイッシュに戻った、
しかしヒウンシティは……

「うわっ！ 酷いな、これは。」

リーフが言った、たしかに周りには
結構ロケット団らしき人が多い、

「おい！ お前ら！ 何をしている！」

ロケット団の格好をした人が話してきた、

「ああん！！？！ 文句あるんですか？」

モスギスが妙に恐ろしい、

「あー、いえ、何も、すみませんでした。」

男は去って行った、

「……怖っ！」

奈都由貴が言う、

「とりあえずどうしますか？」

リーフが提案をする、

「とりあえずどこかに隠れないと。」

白奈が険しい顔で言った、

「で、どこに隠れるんですか。」

リーフが言う、

「あ、それならいい所があるぞ。」

突然ブラックが来た、

「あ、ブラック、久しぶり。」

リーフが懐かしそうに言った、

「おう、久しぶり。」

「で、どこなの？」

白奈が言った、

「『ジャイアントホール』だ。」

「ジャイアントホール？」

リーフが言う、

「うん、そこなら知らないだろう。」

「じゃあ皆さん、行きましょう。」

「
「
「
「
わ
か
っ
た。
「
「
「
「

第47話 準備1（前書き）

PV10000突破了！

第47話 準備1

俺たちはジャイアントホールに来た、
ブラックのキュレムで雪を積もらせて洞窟に入った、

「ありがとう、キュレム。」

「ヒュラッ」

「で、どうするんですか？」

「「「あ。」「」「」」

ブラック他、数名が言った、

「ならまずは仲間を増やすべきでしょ。」

白奈が言う、

「そうか、で、誰が行くんだ？
むやみには出れないぞ。」

プラントが感慨深そうに言った、

「じゃあ、出れるのは奈都由貴さんと銀野さんか。」

「あ、私一度戦ったから無理。」

「ええ！？ 俺かよ！」

パニックってる奈都由貴、

「お願いします！」

「お願い。」

「頼む！」

「私からものです。」

「…分かりました、

そのミッション引き受けましょう！」

「よし！ 後は…。」

「ここで待機ね。」

「よし！ ミッションスタート！」

第48話 準備2（前書き）

杏

「あー、ビックリした。」

リーフ

「どうしたんですか？」

杏

「昨日アクセス解析見たら0だったもんな、
まあ、今日見たらPVが91あったけど、
そのまま0だったら投稿してないわ。」

リーフ

「何か出てる人から見ても良かったですよ…。」

第48話 準備2

「あ、そうだ。」

白奈が突然ひらめいた、

「リーフ君が女装して…。」

「流石に嫌ですよ！ 男として。」

「いいんじゃないの？」

「はあ！？ 父さんまで。」

「私も。」

「銀野さんまで…。」

「このモスグスさんみたいになれば平気よ！」

「だいたい服とかあるんですか！？」

それ以前にバレないですかね。」

「大丈夫よ、声も女子っぽいし。」

白奈が笑顔で言った、

「髪型とか…。」

「じゃあ、この三つ編みを解いて…。」

「…あれ？ 何で俺って三つ編みなんだ！？」

「ああ、色々考えた結果これが一番男子っぽい。」

「髪を切ればいいじゃん。」

「ああ、それも試した。」

「…はあ。」

リーフはため息を吐いた、

「あ、服なら私の貸すけど。」

「いえっ！ 結構です！」

「一人でも多いと集めやすいでしょ。」

「嫌だっ！ 絶対無理です！ いくら何でも。」

「ええー、着てよー。」

「見たいだけじゃないですか！

せめて男子っぽい女子にしてください！」

「じゃあ決まりね。」

「え？ ああ！ しまったー！！！」

結果、 リーフがポニーテールで服は別になった、

…え？ 戦争っぽくない？ 気にしない、気にしない
今回だけですから、たぶん…。

第49話 準備3

俺はヤグルマの森にいる、
橋を渡って右の道？ を進んだ、

「はあ、ブラックが言ってた事本当かなあ。」

昨日ブラックが思索の原に銀次郎さんがいると聞いた、
道も教えてもらったけど…、

「あ、ここか。」

そこに一人の人が立っていた、

「久しぶり、リーフ君。」

「あ、久しぶりです。」

「全部ブラックから聞いてるよ。」

「じゃあすぐにジャイアントホールに行けばいいじゃないですか。」

「そういう訳にも行かないんだよ。」

「何ですか？」

「まあ、カクカクしかじかで……」

・・・で、ピーチクパーチクで・・・

・・・でうんかぬんかなんだ。」

「そうなんですか、さあ、早く行きましょう。」
「分かった。」

一方、奈都由貴は、

「じゃあお願いします、フウロさん。」

「わかったわ！」

「…ふう、あと7人もいるのか。」

ぶるるるるる…

「はい、奈都由貴です。」

「リーフです。」

「リーフか、何の用だ。」

「今銀次郎さんとジャイアントホールに戻ってます。」

「おう、って銀次郎!？」

「? あ。」

「…じゃあな！」

「はい。」

ぶちっ! つー、つー、

「…まあ、今はいいか、さあ、ミッション続けよう。」

第50話 宣戦布告

とりあえず今いる人を確認……

リーフ、ブラック、父親、銀野、白奈、奈都由貴、
銀次郎、イッシュムリーダー四天王全員、アデク、
モスギス、荒木、市民数人、

確認終了……

「うっし！ 準備はいいか！ ポリゴンZ。」
銀次郎が言った、

「ポリイイ」

「じゃあ、最初はモスギスさんから。」

「分かりましたですテニー。」

ロケット団本部、
位置はリーグのチャンピオンの部屋の後ろ回り、

「赤井様！ プログラムが何かに支配されてます。」
「何だと！」

放送、

モスギス

「あら嫌だ！ 奥さん聞きました？ 近所の八百屋の大根が大安売りと聞いて宣戦布告に来ました、どうも もす です、べ、別に手加減しなくてもいいんだからねっ！」

白奈

「えー、私は白奈です、そろそろあなたたちの悪事もお終いよ！」

奈都由貴

「よく分かんないけどぶっ潰す！」

ブラック

「おい！ 赤井！ チャンピオンの座返してもらっぞ！」

銀野

「久しぶりね、赤井君、今度こそあなたの負けよ。」

アデク

「俺のイッシュを返してもらおう。」

銀次郎

「どうせジंकウスでも見つけたんだろう、まあ、成功だけだな。」

プラント

「まあ、赤井の考えそんな事だな。」

リーフ

「言いたい事は『俺たちはロケット団に戦争を仕掛けます！』」

第51話 戦争！ 対ロケット団（前書き）

何か早く進めたいのでできるだけ投稿します、
あと人が多いのと口調が似てる人がいるので
『○○○が言う、』が多くなると思います、

第51話 戦争！ 対ロケット団

俺たちはチャンピオンロードを突破し、
リーグの前に来た、

しかしそこには壁があった、材質は鉄で色は金に近い、
真ん中辺りにRの文字がある、

「うわっ！ 壁だ。」

奈都由貴が言った、

「僕に任せる！」

「俺に任せてください！」

リーフと銀次郎が同時に言った、

「えーっと、…任せるわ」

白奈が言う、

「いけ！ バグ太郎！」

「ウォーグル、破壊して。」

バグ太郎『バグフーン』は噴火、

ウォーグルはギガインパクトをした、

「ぐうオオオオオ！！」

「バグウウウ！！」

バグ太郎は背中の中辺りから噴火、
…表現難しい、

ウォーグルはお馴染みの攻撃、

バズドーン！！

奈都由貴が言う、

「分かってるわよ。」

リーフは、ジャノビー以外全員出した、

銀次郎はバグ太郎、オーダイル、メガニウム、
ピカチュウ、ハウオウ、ミュウを出した、

白奈はトリトドン、ガブリアス、ミカルゲ、
トゲキッス、ラティース、ロズレイドを出した、

奈都由貴はイワパレス、レジュリア↑ルージュラの進化系
バーネッコ、シビルドン、メタゲラス、オオイナリ

→ ← 自分で調べてください ← →

銀野はジバクン、ラティオス、ホムロソク、
コジョンド、メタゲロス、ヤミクラゲを出した、

モスギスはヤミクラゲ、ドラピオン、ズルズキン、
マニニューラ、チェキラス、ディザソルを出した、

プラントはリーフィス、リーフィア、キュウコン、
シェイミ（スカイフォルム）、ジュカイン、ナッシーを出した、

荒木はマニニューラ、クロバット、ゲンガー、
ジバコイル、フーデイン、サザンドラ、

後はアデクのとイッシュジムリーダーと四天王の、
市民はご想像にお任せします、

第52話 持久戦

「お前ら！ 突撃――！」

プラントが言った、

「おー！！！！！！」

「もーもーす！　「じーじー」！」

全員それぞれ攻撃、大文字、雷、吹雪、

クロスポイズン、地震、流星群、飛び膝蹴り、

シャドーボール、ギガインパクト、鬼火、

電磁波、毒毒、催眠術、怪しい光、メロメロ、

波乗り、ドラゴンダイブ、濁流、エアスラッシュ、

リーフブレード、ハイドロポンプ、ボルテッカー、

10万ボルト、
火炎放射、
冷凍ビーム、

サイコキネシス、サイコソック、悪の波動、

龍の波動、水の波動、ハートスタンプ、捨身タックル、

ゴッドバード、ドリルライナー、地ならし、かみ砕く、

爆裂パンチ、岩雪崩、ストーンエッジ、ワイルドボルト、

ニトロチャージ、アイアンテール、逆鱗、暴れる、

花びらの舞、虫のさざめき、虫の抵抗、オーバーヒート、

メガホーン、冷凍パンチ、炎のパンチ、雷パンチ、

ダストシュート、ドラゴンビート、ギガドレイン、

聖なる炎、インファイト、フレアドライブ、

凍える風、怪しい風、追い風、あくび、ヘド口爆弾、

辻斬り、不意打ち、挑発、エナジーボール、

ダイクリゾブル、大成長、ジオインパクト、

潜る、ダイビング、絶対零度、地割れ、ハサミギロチン、

袋叩き、幻惑の粉、マッハパンチ、アームハンマー、

コメントパンチ、バレットパンチ、噴火、馬鹿力、アクアジェット、

氷の牙、炎の牙、雷の牙、毒の牙、ポイズンテール、
アクアテール、ハードプラント、ハイドロカノン、
ブラストバーン、ポイズンリーフ、アクアボルト、
コールドフレア、フリーズボルト、Vジェネレート、
シェルブレード、リベンジ、熱湯、しっぺ返し、
宿り木の種、大あくびをした、

ロケット団たちは、（カットします…）――

「くそっ！ きりが無い！」

奈都由貴が険しい顔で言った、

「まだまだ〜！」

プラントが言う、

「モスギスさん、諦めません！」

「もつと行けるわよ！」

白奈が言う、

「ぶっ潰すまで止めないぞ！」

銀次郎が言う、

「私のポケモンはこの程度では疲れないわよ。」

銀野が言う、

「うおおおおお！！！！！」

荒木が叫んだ、

「そこだ！ キュレム！」

ブラックが言う、

「ウォーグル！ 今日には存分に暴れていいぞ！」

リーフが言う、

「はっはっは！ その程度か。」

アデクが言う、

「僕たちももつと本気だすよ！」

デントが言う、

「ムーランド！ かたき討ち！」

アロエが言う、

「僕の虫ポケモンはタフだよ！」

アーティが言う、

「さあ！ 痺れさせるのよ！」

カミツレが言う、

「ふん！」

ヤーコンは落ち着いている、

「そのまま突っ込めー！」

フウロとアイリスが言う、

「・・・・・・・・」

ハチクは黙っている、

「こんな少年が……」

シャガが言う、

「もつとだ！ もつと出せ！」

ロケット団の紫の髪の人と言った、

ポポポポポポポポポポポポ！

「うわっ！ まだいるのか。」

奈都由貴が言う、

「奈都由貴さん！ 弱音吐かないでください！」
リーフが言った、

まだまだ戦いは続く…

第52話 持久戦（後書き）

技長すぎた、すみません、以後気を付けます。

第53話 大将戦

「ひっひっひ、まだ半分も出してないぞ！」

「マジかよ……。」

奈都由貴が言う、

「……俺が。」

リーフが何かを言おうとした、

「分かってる！ 早く大将の首取ってこい！」

ブランドが言った、

「うん！ 分かった！」

「よっしゃあああ……！！！」

お前のために道を開けてやるぜ！」

「ドータクン、メタグロス、大爆発！」

カトレアが言った、

「シェイミ！ シードフレアだ！」

そして大きな爆発、

真ん中に空洞が、

「やべえ！ 早くカバーだ！」

「行っけええええ、ウォーグル！ ギガインパクト！」

ウォーグルは多くのポケモンを吹き飛ばして爆進する、
ドサイドンですら勝てない、

「ウォーグル、止まって。」

リーフがウォーグルに乗りながら後ろを向かないで言った、

「奈都由貴さん！ まだ諦めないでくださいよ！」

「誰が諦めるか！ コノヤロー！」

リーフはチャンピオンの部屋に向かった、
そして部屋の前で降りた、

「…ついに始まるのか。」

リーフは少し緊張している、
そして部屋に入った、

前父に連れてってもらった時とあまり変わらない、
台の上には男が立っていた、

「…お前がリーフか、少しは楽しませてくれ、
銀次郎みたいにな。」

「言われなくても！」

第54話 原点にして頂点

「行け！ ピカチュウ。」

「ピッカー！！！」

ピカチュウはほっぺに火花を散らしている、

「行くぞ！ アブソル！」

「ホウオオオオオ！！！」

アブソルもやる気満々！

「ピカチュウ、アイアンテール。」

「アブソル！ メガホーン！」

両者ぶつかり合う、パワーはほぼ互角、

しかしスピードはピカチュウの方が圧倒的に上、

「残念だったな、この勝負もらった！」

「赤井さん、甘いですね。」

「何だと！ ピカチュウ！ もう一度アイアンテール！」

アブソルはもの凄い速さで避けて、

「不意打ち！」

アブソルの不意打ちは見事に当たった、

「さらに挑発！」

「じゃあ力押しで行けばいいこと、
ピカチュウ！ ボルテッカー！」

「アブソル！ 不意打ち！」

不意打ちは当たったが体制は崩れずに当たった、
しかもとてつもなく吹き飛ばされた、

「やっぱりその程度か…。」

「はっはっは！ まだまだ余裕です！」

アブソルは戻って来た、

「何！ 紙耐久のアブソルが耐えただと！」

「俺のアブソルはそこまで軟らかくないですよ！」

「…なるほど、面白い！ そろそろ本気出すか。」

「ええ！」

「ピカチュウ、ボルテッカー。」

さっきよりも威力が強い、

「アブソル！ リーフブレード！」

再びぶつかり合う、

今度はピカチュウが勝った、

「うわっ！ 何て威力、でも！」

「何だ。」

「俺には『コイツ』がいる！ 力なら負けない！」

第55話 超新星にして破壊神

「行け！ コジョンド！」

「さあ、行くぞ！ ボルテッカー！」

ピカチュウは再びボルテッカー、

「コジョンド！ 一歩ずらして膝蹴り！」

コジョンドは一歩ずらして攻撃、ピカチュウの腹部に直撃、それを赤井がキャッチそた、そのあとすこし反動で後ろにずった、そして表情は変えずに言った、

「…、有難う、フシギバナ！ 出番だ！」

「バアナアアアアア！」

フシギバナはどっしりと構えている、

「フシギバナか、コジョンド！ アクロバット！」

フシギバナには効果抜群、

しかも飛行のジュエルで威力を大幅に強化、

フシギバナは顔を歪めたがすぐに戻してハードプラント、コジョンドは倒れた、

「なかなかの威力だ。」

「くっ！ …、パルキア！ 頼んだ！」

「パるっ」

パルキアは大事な戦いにも関わらず能天気、
というよりかは嬉しそう、

「パルキア！ 吹雪！」

パルキアは吹雪をした、
フシギバナは攻撃の反動で動けない、
さらにもう一発撃ってフシギバナは倒れた、

「やるな。」

「まだまだですよ。」

「そうか、行け！ カビゴン！」

「カアアビイイイ！！」

ドスン！

流石にカビゴンは重く降りた場所に少しひびが入った、

「カビゴンか、厄介だな。」

「カビゴン！ ギガインパクト！」

もの凄い勢いで突進してくる、

「パルキア！ 波動弾を直接当てろ！」

「パアアアアるうううう……。」

パルキアは力を溜め始めた、

波動弾とカビゴンが衝突、

結果カビゴンが勝つ^{まさった}た、

「うわあ、なんじゃそりや。」

「その程度のパワーじゃ勝てないぞ。」

「じゃあウオーグル！ お前なら大丈夫だ！」

第56話 激しくなる戦い（前書き）

誰か作家のかたで俺のバトン誰か引き継いでください、
お願いします。

第56話 激しくなる戦い

戦いはさらに激化、

もはやチャンピオンの部屋は跡形もない、
残ってるのはワープパネルだけ、

「カビゴン！ ギガインパクト！」

「俺のウォーグルもギガインパクトだ！」

両者の攻撃がぶつかり合う、大きな砂煙が何度も起きる、
パワーはほぼ互角、機動力はウォーグルの方が上、
しかしカビゴンはウォーグルとは違って吹雪が使える、
ただ機動力が違うのでカビゴンはすぐに接近される、
それゆえにウォーグルも特殊技が使える、

「ウォーグル！ ドラゴンビート！」

「カビゴン！ 吹雪！」

吹雪と音波がぶつかり綺麗な光景が生まれる、
まるでダイヤモンドダスト、
いつまで経っても終わらない、

「この一発に賭けるか、ウォーグルもそろそろ限界に近い。」
「行くぞ！ ギガインパクト！」

再び両者のギガインパクトがぶつかり合う、
そして両方が倒れた、

「互角、…久々に燃え上がる戦い。」

赤井は笑いながら小声で言った、

「行きますよ！ ミロカロス！ 頼んだ！」

「ミロオオオオオオ！！！」

「ファイヤー！ 焼き尽くせ！」

「フアアアアア！！！」

タイプ相性を考えればミロカロスの方が有利、

「ミロカロス！ ハイドロポンプ！」

大量の水がファイヤーに襲い掛かる、

「ファイヤー！ 日本晴れ！」

強い日差しになった、空が眩しい、

ハイドロポンプの威力が落ちる、

ファイヤーは余裕でハイドロポンプを受け止めた、

「そしてソーラービーム！」

ミロカロスには効果抜群、しかも日が強いのでノーリスク、

「ミロカロス！ 受け止めろ！」

「何だと！」

ミロカロスはソーラービームを受け止めた、

「そしてミラーコート！」

「何！」

ファイヤーにとつもないものが襲い掛かる、
もちろん耐えられる訳もなく倒れた、

「……こいつに賭けるか。」

第57話 終わりという名の決着

「頼んだぞ！」

赤井は最後のモンスターボールを投げた、そのボールから出てきたのは、青い尻尾、白い肉体、かなりの威圧感、

「何だあのポケモンは！？」

「こいつはミュウツー。」

「よく分かんないけど倒す！」

「できるかな？ ミュウツー！ エレキボール！」

「ミロカロス！ 吹雪！」

丸い電気体は吹雪をも打ち破りミロカロスに直撃し、倒れた、

「負けてたまるか！ アルセウス！ 出番だ！」

「いい負けん気だ、ミュウツー、波動弾。」

「アルセウス！ 大文字！」

しかしお互いの技はすり抜け両方に直撃、

「まだまだ！ 裁きの飛礫！」

ものすごい数の光線が曲がりながら全てミュウツーの方に向かっていく、

「ミュウツー！ サイコブレイクだ！」

ミュウツーも負けじと撃つ、
アルセウスは攻撃を辞めない、
一発ミュウツーの後方に回り込み直撃、
その隙にダメ押しでさらに追撃、

「ミュウツー！ まだ行ける！ 諦めるな！」

両方のポケモンが雄たけびを上げると、
両方のポケモンが少し笑った、

「ミュウツー！ 波動弾！」

「アルセウス！ 滝登り！」

アルセウスは水をまとって突進、
しかし波動弾が直撃、何発も、

「アルセウス！」

「まだまだ行けるぞ！」

「よし！ 流星群！」

隕石のようなものが大量に落ちてくる、

「怯むな！ サイコブレイク！」

ミュウツーはフルパワーで全てをはね返した、
バリバリムシャムシャ、

「おい、何食ってるんだよ。」

「『白いハーブ』です！」

「…ということは。」

「アルセウス！ 裁きの飛礫！」

ミュウツーはかなり体力を消耗している、

「ミュウツー！ 守る！」

「ええ！」

「いざという時のための覚えさせた。」

ミュウツーの守るは全てを弾くとサイコブレイクを撃った、

「アルセウス！ 大文字！」

今度は大文字がサイコブレイクを弾く、

「ミュウツー！ 波動弾！」

「アルセウス！ 大文字！！！」

再びぶつかり合う、両者一步も譲らない、
お互い限界を超えている、

「これで決めるぞ！ ミュウツー！ サイコブレイク！」

「アルセウス！ 裁きの飛礫！」

大技はぶつかる、激しい音を立てながら、
大きな砂煙でよく見えない、
そして砂煙が消えた時！

ボタン！

どっちかが倒れた、

「…負けた、これでイッシュは…。」
「

第58話 それでもあなたは

「いや、終わりじゃないぞ。」

「え？」

赤井はリーフに近寄ると、

「俺は、ただ楽しいバトルをしたかったただけだ。」

「…つまり。」

「ああ、そうだ。」

赤井は大声で言った、

『今からロケット団は解散する！』

ざわざわ・・・ざわざわ

ざわざわ ざわざわ

「ちよつ、ボス？」

「もう俺はボスじゃない。」

「ならば…。」

「お前が俺に勝てるのか？」

「うつ・・・。」

男は去って行った、

「…赤井さん…。」

「楽しかったよ、有難う。」

二人は硬い握手をした、

「俺は出頭する。」

「え？ でも…。」

赤井はリーフ肩に手を置き言った、

「いいか、よく聞け、『ポケモンマスターだから許される』訳ではない、これからポケモントレーナーになるやつに失礼だし罪を償った人にも失礼だ。」

「……………」

「じゃあな、多分下の方で警察が待ってるだろう。」

赤井はファイヤーに乗ってソウリュウシティに向かった、

「…待って下さい！」

リーフもウォーグルに乗って追いかける、

その頃銀次郎たちは、

「あれ、握手してる、そうか『友情』が芽生えたな。」

銀次郎が言う、

「いいわね、戦いの後の友情。」

白奈が言う、

「あ！ リーフが赤井を追いかけてる！ 待てよ！」

銀次郎はリーフたとを追いかける、

そしてソウリュウシティ、

「来たな！ 赤井！ ここで逮捕する！」

そこには国際警察のハンサムがいた、

「そんなことしなくても逃げないぞ。」

「赤井さん！」

「…悲しいな、別れは。」

「赤井さん…。」

「…こんなふがないトレーナーを、許してくれ。」

「もう遺言は終わったな、行くぞ！」

赤井がパトカーに乗りかけた、その時、

「あなたは、それでもあなたは！ 『立派なポケモンマスターですよ！』」

リーフは泣きながら言った、

「ぐすつ…。。」

「おい！ リーフ君！」

「…銀次郎さん…。」

「……泣いてるのか、そうだな、僕も悲しいよ…。」

銀次郎はリーフに肩を組みながら言った、

「リーフ!」「リーフ君!」「リーフ!」
「リーフさん!」「リーフ君。」

皆が後から来た、心配そうに、

「皆さん…。」

「何、また会えるさ!」

ブランドが言った、

「そうよ、きつとね。」

銀野が言う、

「どうだ! 諦めなかったぜ!」

奈都由貴が誇らしげに言う、

「アホですか! 奈都由貴さん! K YのY M Gですね。」

モスギスが言う、

「何だところ、捕まえてやる!」

奈都由貴が怒る、

「こつちだよ、捕まえてごらん。おほほんぬ。」

モスギスが挑発をする、

「ははははは…。」

リーフが泣きながら笑う、

「お! 笑った! 今日は皆でパーティだ!」

ブランドが言う、

「…………お…………!…………!…………!」

第58話 それでもあなたは（後書き）

感動の最終回・・・じゃなかった、
リーフの冒険はまだまだ続きます！
お楽しみに！

第59話 乗斗へ（前書き）

ユニーク2000突破いたしました！

第59話 乗斗へ

リーフはイッシュ制圧事件から一か月後、ヒウンシティの船に乗って、乗斗にやってきた、

アサギシティ
浅黄シティ、

船から降りて、受付の場所に来た時、

「ん？ 何だか騒がしいな。」

ざわざわ ざわざわ

ざわざわ ざわざわ

受付から出てみると、

「おー！ のー！ もす太郎違いまーす！ モスギス言いまーす！」

「ああ、そうだったな、さあ、バトルだ！ もす太郎。」

「だからもすです、覚えて下さい、ぶんぶん。」

「あ！ アデクさん！ モスギスさん！」

「お、リーフ君久しぶりだな。」

「リーフさん、おひさしぶりの日干しです！ 日干しと言えばマジ

カルバナナ、マジカルバナナしましょう！」

「相変わらずですね。」

「キヤー！ そんなに寝めないでください！ 照れちゃって顔がオ
ーバーヒートです！」

照れちゃってと言ってるが顔は真っ赤ではない、

「いやいや、褒めてませんよ。」

「で、リーフ君は乗斗で何をするんだ？」

「特に無いです、ただの旅行ですよ、アデクさんは？」

「わし？ わしも特にないな。」

「私事です。」

一人の女性が、

「あ、あのー、もしかしてリーフさんですか？」

「え？ 違いますよ？」

「嘘付くなよー。」

アデクが言う、

「あははは、そうですね。」

「え？ あのイッシュを救った人？ まじ！？」「うおっ！
本物だ！」

「スーパースターが二人！」

「あのー、私もスーパースターなんですけど。」

モスギスが言う、

「え？ 誰？ 知らないなあ。」

「そうですか、しょぼぼん…。」

「大体自分でスーパースターとか言わないですよ、普通。」

リーフが言う、

「さらにしょぼん…。」

「あ！ モスギスさん、そんなに落ち込まないで下さい！ 強いですよ！」

「モスギスさん、復活！ ワッショイ！

今から新王地方に修行に行きます、どうも もす でした。」

「え？ モスギスさん？」

モスギスは去って行った、

「…おだてすぎた。」

「まったく、このこの…！」

「はあ、あれこれしてる内に夕方ななっ たじゃないですか。」

「そうだな！ それより腹減った、飯食いに行こうぜ！」

「そうですね。」

第60話 アデクとバトルフロンティアに挑戦 レコーダー

アサギのポケセン、

リーフはアデクと夕食を食べる事になった、

「ぐ、ぐむっ！ ガツガツ！ バリバリ。」

「…すごい食べっぷりですね。」

「んん？ そうか？」

「大体ファンの人達が…、白奈さんの時もでしたけど。」

「そうだよなー、人気者は困るよなー。」

「うーん、それにしても気になる…。」

その後も食事は続いた、

*

翌日、

「朝だー！ リーフ！」

「うわっ！」

アデクが大声で言った、

「もう朝… ってまだ4時じゃないですか！」

「面白そうな施設見つけたんだよ、これを見せてくれ。」

リーフはアデクからパンフレットのような物を渡された、

『バトルフロンティア？』

「そうだ！ 何かサブウェイより面白そうだぜ！」

「そうですね、ふわぁ、行ってみましょう。」

*

バトルフロンティア、

「いらつしゃいませ！ ようこそ、バトルフロンティアへ！」

複数の受付の人が言った、

「お！　きれいなお姉ちゃん、後で食事にも行かない？」

受付の人は苦笑いをしている、

「アデクさん！　困ってますよ！」

「あ、あのー、バトルレコーダー持つてるでしょうか？」

「あ、モスギスさんから貰ったのがあります。」

「わしもあるぞ？」

「はい！　ではこのように……。」

急に二人のレコーダーを改造し始めた、
そしてリーフのを改造してる人は笑だしそう、

「はい！　出来上がりました！」

「……俺の何かおかしいですか？」

「い！　いえ！　特になにも。」

「ん？　って！　よく見たら沢山『どうも　もす　です』って書いてる！」

「バツクにも書いてるぞ。」

「え？　あ！　本当だ！　モスギスさあああああん……！」

こうして二人の戦いは始まるのであった、

第61話 アデクとバトルフロンティアに挑戦 キャッスル編1

俺達はフロンティアの敷地内に入った、
とてもにぎやかだ、

「おう！ カトレアじゃねえか。」

アデクが言う、

「あ、カトレアさん。」

「あら、久しぶりです、アデクさん、リーフさん。」

「どうしてカトレアがここにいるんだよ。」

「え？ 知らなかったんですか？ 私このブレーンをしてるの。」

「まじかよ！ 知らなかった！ なぁリーフ。」

「え？ 新王じゃ有名ですよ、イッシュで四天王のことを知らない人もいますし。」

「そうだったのか…。」

「良かったらバトルキャッスルに挑戦してみない？」

「バトルキャッスル？」

バトルキャッスルとは、

勝つごとにキャッスルポイント（CP）を駆使して戦う、
バトルに勝つごとにCPを獲得できる。なるべくダメージを受けず
に勝ったり、レベルの高い勝ったりすると貰えるCPが増える、

略~~~~~

（Wiki参照）

「はいわかりました。」

「で、CPを使うんだな。」

「はい、では待ってます、あと。」

「はい。」

「何だ。」

「この施設は全てのポケモンが同じレベルになりますから力押しじゃ勝てませんよ。」

「分かってますよ、俺は今のようになるまでは戦術でカバーしてましたから。」

「わしも長年してる、この知恵を活かす。」

第62話 アデクとバトルフロンティアに挑戦 キャッツスル編2

「うーん、どうしようかなあ。」

「あ、銀次郎さん。」

「お！ 銀太郎。」

「あ、リーフ君、アデクさん、あと銀次郎です。」

「今からリーフとここに挑戦するのだがどうしたらいいんだ？」

ズコッ！

リーフと銀次郎はずっこけた、

「「アデクさん！」」

「わりいわりい、じゃあ頼む。」

アデクは後ろの頭をかきながら言った、

*

「「よろしくお願いします。」」
「おう!」「はい、お願いします。」

とりあえず一回戦目が始まった、
一回目、二回目と7戦圧勝、

その次の20戦目まで余裕で突破、

「ここまで来ましたね、リーフさん、アデクさん。」

「どうだ! でカトレアは誰と組むんだ?」

「私は執事の^{コ克蘭}鎧と組みます。」

「よろしくお願いします。」

「こちらこそ。」

「よっしゃー! 始まりだー!」

アデクはかなり空気読めてない、というよりは場には合わない、

リーフは緊張気味↑最強トレーナーのくせに

フロンティアブレーン二人はかなり冷静、

ちなみにこの建物は若干壊れている、

おまけ

リーフ

「何か俺と行動してる人って大体困った人だ、せめてまともな人と
行動させてくれよ(泣

銀次郎

「困った人って、…白奈さんはどうなんだよ。」

リーフ

「白奈さんは案外おっちょこちょいです。」

銀次郎

「そうなの!？」

リーフ

「そうなんですよ。」

銀次郎

「意外で、正直しっかりしてるかと思った。」

第63話 アデクとバトルフロンティアに挑戦 キャッスル編3

鎧はエンブオー、カトレアはランクルスを出した、

「…結構素早さの低い先発ですね。」

「わしの経験上これは『トリパ』だな。」

「トリパ？」

「おう、説明するぞ

トリパとは（知ってる人は読まなくて結構です）

技の一つトリックルームを利用した戦略である

トリックルームは素早さは低い順に先制できるのを利用して遅いポケモンを多く使う

つまり遅くても安定して先制できる、機動力パにとっては脅威、特に紙耐久の素早さ系ポケモンにはきつい、

ということだ。」

「何か、その。」

「大丈夫だ、わしはシュバルゴを使う。」

「じゃあ俺は、えーっと。」

リーフはパーティは機動力のあるポケモンが多い、一番機動力の低いポケモンでもウォーグル、確実にトリルをされたら先制される

「ええい！ 任せたぞ！ ミロカロス！」

「お、あえてミロカロスにしたか、行くぞ！ シュバルゴ！」

「行きます！ ランクルス、トリックルーム。」

一気に周りの空間は歪んだ、とてもおかしい感覚に襲われる、急にランクルスとシュバルゴの動きが速くなった、逆にエンブオーとミロカロスは遅くなっている、

「アデクさん！ 任せましたよ！」

「おう！ シュバルゴ！ メガホーン！」

「ランクルス、リフレクターよ！」

ランクルスは壁を張る、シュバルゴは壁に突撃、しかし何とか打ち破った、

「俺も何かしないと、ミロカロス！ ハイドロポンプ！」

「エンブオー、ワールドボルトです。」

大量の水が電気をまとったエンブオーに襲い掛かる、しかしエンブオーが打ち破った、

「危ない！ シュバルゴ！ 受け止める！」

シュバルゴがミロカロスの代わりにワールドボルトを受け止めた、

「ありがとうございます、アデクさん。」

「なあに、助け合いよ！ この程度の攻撃大したことない！」

「流石でございます、アデクさん。」

第64話 アデクとバトルフロンティアに挑戦 キャッツスル編FINAL

「エンブオー、フレアドライブです。」

「ランクルス、サイコショック。」

「シュバルゴ！ メガホーン！」

「ミロカロス！ ハイドロポンプ！」

ランクルスはミロカロスを攻撃、ミロカロスはエンブオーを攻撃、エンブオーはシュバルゴを攻撃、シュバルゴはランクルスを攻撃、結果、シュバルゴだけが残った、

「流石アデクさん。」

「これくらい予想できる、さあ！ かかってこい！」

リーフはジャノビー、カトレアはメタグロス、鎧はエンペルトを出した、

ちなみに現在の先制できる順

ジャノビー<エンペルト<メタグロス<シュバルゴ

「——メタグロス、ジャノビーにバレットパンチ。」

「ええ！ ジャノビー！ リフレクター！」

メタグロスはジャノビーに襲い掛かる、ジャノビーは壁を張ろうとしたがトリルのせいで出るのが遅くなっている、

「ジャノビー！ 大丈夫か！」

「ジャノ」

「何だ、まだ余裕そうだな。」

アデク側は、

「シュバルゴ！ 起死回生だ！」

「エンペルト、瓦割。」

さりげなくシュバルゴが無双をしている、

リーフ側、

「ジャノビー！ 宿り木の種！」

「メタグロス、アームハンマー。」

お互い当たった、ジャノビーが異常にタフになっている、
メタグロスは結構苦しそう、

さらにシュバルゴのメガホーンが襲い掛かる、
メタグロスは遭えなく撃沈、

「お見事な戦いでございました。」

「おう！ そうだな！」

「自分で言わないで下さいよ…。」

「でもわし大活躍！」

「それはそうですけど…。」

お知らせ

突然ですがお知らせです、

バトルフロンティア編残ってるのと

アデクとの会話などをオールカットします、理由はいくつか上げられます、

？ ほのぼのしない

？ 多分無双する↑そんなん見たってつまんだろ

？ 長い、と言うよりかはめんどい

？ 相手のタッグを組む人が浮かばない、

？ 早く進めたい

？ 『人間になったポケモン』の更新が遅くなる↑とてつもなく

といゆうような感じです、

雑談~~~~~

リーフ

「…ええ！」

杏

「しかたない、特に『ほのぼの』は書いたことない。」

リーフ

「この次も更新するんですか？」

杏

「しないよ。」

リーフ

「じゃあ実質更新してない事のなりますよ！」

杏

「一応これも更新の一つに入と思う。」

リーフ

「うーん、じゃあこの後はどうなるんですか？」

杏

「うーん、遺跡、かな？」

リーフ

「遺跡って、アルフの遺跡しかありませんよ。」

杏

「むむ？ もう一つあるぞ。」

リーフ

「もう一つ？」

杏

「まあ、後のお楽しみって事で。」

第65話 外伝3 アルセウス

なんだかんだでバトルフロンティアの挑戦が終わった、俺は^{アルフ}亜瑠伏の遺跡に来た、

「…静かな場所だな、…何か不気味だな。」

ポン！

突然アルセウスが出てきた、

「どうしたんだよ、アルセウス。」

「…昔きたことある、その事を思い出した。」

「ああ、そういえば銀次郎のポケモンだったな。」

「話すぞ。」

「うん。」

アルセウスは感慨深そうの言い始めた、

*

それは、数年前 ある日のこと、

「ここが天眼山か。」

銀次郎は親王の天眼山の頂上、
周りは静まり返っている、

「…あつた！　これが^{ハッキンたま}白金玉か。」

地面の上に落ちていた不思議な玉を拾った、

「うっ！」

「どうした！　銀次郎！」

アルセウスが言う、
他の手持ちのポケモンも出てきた、

「く…．．．苦しい。」

その時、銀次郎は何かの声が聞こえた、
ギラアアアアア！

「…ドサ！」

ここからポケモンの声も出します

「おい！　銀次郎！」
バグ太郎が言う、

「銀次郎？　さん…死んじやだよ！」

メガにウムが言う、

それぞれ言うが息絶えた…

最終回 アルセウスがきた理由（前書き）

突然ですがいったん完結します、
いつか続編書きます、

最終回 アルセウスがきた理由

その後アルセウスが復活させたそうだが、かなりギリギリだったが、

*

「へえ、そうなんだ、で、アルセウス。」

「何だ。」

「何で俺のところに来たの？ 銀次郎さんが無理やり行かせる訳がないし。」

「ああ、それはだな。」

*

その時はリーフが冒険を始めた頃である、
銀次郎が部屋に戻った時、

「うっし、飯だぞー。」

勢いよく食べるバグ太郎、

普通に食べるメガニウムとミュウ

もう食べ終わったオーダイル

少しずつ食べるピカチュウ、

一匹だけ食べてないポケモンがいた、

「おい、アルセウス、具合でも悪いのか？」

アルセウスの顔は赤く妙に大人しかった、

「い、いや、そういうのじゃなくて、…えーっと。」

今の銀次郎はミュウのおかげでポケモンの声が聞こえるのだ、

「あ、わかった、そういうことか。」

オーダイルが何かにきずいたようだ、

「ん？ 何だ？」

「鈍感の銀次郎に分かるわけないだろ。」

バグ太郎がニヤニヤしながら言った、

「むふふー、主は鈍感なのか。」

ピカチュウが言う、

「？」

ポケモンの食事が終わり、皆眠った、
その日の夜、

「なあ、アルセウス。」

「何だ。」

「お前、あいつのこと好きなのか？」

「……………うん。」

「…わかった、きかいがあればいいぞ。」

「え。」

「遠慮はいらねえ、僕に二言はないさ。」

「うん、ありがとう。」

*

現在、

「……………。」

リーフは黙り込んだ、

最終回 アルセウスがきた理由（後書き）

皆さん、これまで見ていただいて有難う御座いました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8615v/>

リーフブレード

2011年10月28日20時07分発行